

国際交流レター 第16号



(モンタナ研修団御船町訪問)

CONTENTS

国際交流に思う.....	2	交換教授姉妹校滞在印象記.....	19
MSU研修団6年ぶりに来学.....	5	短期派遣留学生報告記.....	25
新科目「日本事情特講」開講.....	9	長期交換及び長期認定留学生報告記.....	27
第4回甲南イリノイ学生研修団来学.....	9	本学留学生への交流の主な案内.....	33
第6回大田大学校学生研修団来学.....	10	1993年度地域別外国人留学生数.....	34
第2回大田大学校経営行政大学院来学.....	11	1993年度外国人留学生名簿.....	34
韓国大学生訪日研修団来学.....	11	海外留学生一覧.....	37
大田大学校職員研修団来学.....	12	海外ゼミ研修一覧.....	37
国際経済学科「外国事情研修」.....	13	1993年度外国人留学生の奨学金受給状況.....	38
第3回大田大学校訪問学生研修団.....	16	1993年国際交流EVENTS.....	40
第3回外国人留学生弁論大会.....	18	SEMINARS.....	43

////////////////// '93.12.31 ////////////////// 熊本商科大学・熊本短期大学国際交流委員会 //////////////////

'94.4.1 大学名変更「熊本学園大学」

国際交流会館建設への道

熊本商科大学長 岩野茂道



新しい年が明け、わが大学もいよいよこの春から7学部11学科（第2部を含む）の総合大学として「熊本学園大学」の名の下に未知の世界に漕ぎ出すことになりました。ここまでの決して楽でなかった道のりを振り返るとき、学内関係者の努力と同時に多くの海外の友人達、とりわけ姉妹校や交流提携校の学生

や諸先生達の変わらぬ支援を思いうかべます。今回新しく発足する「外国語学部」は、同時に新設される「社会福祉学部」もそうですが、このような友人達との深く長い友情と協力無しには構想することはできませんでした。アメリカ・モンタナの各州立大学およびキャロル大学の皆さん、韓国・大田大学校と中国・深川大学の皆さん！ほんとに有難う。

そして熊本市の協力のもと学生交流を続けているアメリカ・テキサス、サンアントニオの諸大学から来ている学生諸君、イギリスはリバプール・ジョンモーズ大学、フランス・リヨン商科大学の学生諸君！元気ですか。今年もまた新しくドイツ・ラインランド・プファルツ州立専門大学から日本科の学生も留学を希望しています。「外国語学部東アジア学科」がスタートしますので、中国・韓国の新しい大学との交流も自ら射程に入ってくるでしょう。

総合大学の出発に向けて、教授陣も一挙にカラフルになります。たくさんの native teachers が、アメリカ、中国そして韓国からおいでになります。学生もファカルティ・メンバーも教職員一緒になって、いつも語り合い、食事を楽しみ、合宿できるひろいスポットがキャンパス内にあればと皆で願っていましたが、ようやく近い将来そのための国際交流会館を建設できるようになりました。場所をどこにするか、どんな設計を、第一どんなコンセプトで構想するか、まだこれからですが楽しみは後にとっておきましょう。

世界のあちこちに未だ紛争は絶えませんが、私達がこうして絶えることなく国ぐいの壁を越えて語らいを続け、交わりを続けているかぎり新しい世紀は私達にきっと素晴らしい贈り物を届けてくれるでしょう。Thank you every body!

(1994年1月執筆)

交流活動への一提言

熊本短期大学長 園田 富雄



大学間の交流が開始されて10年が経ち、ようやくこの仕事の性質や要領がわかりかけてきたと言ってもよからうし、問題点も少しずつその姿をあらわしてきた。何でも同じだが、本質的なものを求めるということは大変なことで、ここでも自己点検と評価はつきもの。

5月の連休にモンタナのミズーラの100周年祭に理事長に同行して出かけてきたが、びっくりしたのは、外国からの大学のお客様の接待を何から何まで実際に担当していたのは学生たちであった。学生が中心になって、ホテルの案内やパーティの接待やこと細かな送迎のお世話に実に要領よく、品よく、大学生らしく、しかも体をよく動かしてやっていた。ただ肝心の公的挨拶になると、大学のスタッフ、交流委員長や学長・ディーンがあっさりと簡潔に行っていた。誇張と抑揚もない、事実を則した、流れるような挨拶。

わが交流センターも要件が増えて、手が足りなくなっているのは事実であろうが、学生のVolunteerをもっと発掘して、(先生のVolunteerも)皆で、国際交流センターだけでなく、お世話をする体勢、そういう流れが出て来ないと、いくら人を交流センターに入れても、またすぐたりなくなるとのこと。

たとえば、向こうに行ったことのある学生の中から、あるいはこれから向こうに行きたいという学生も探して、留学生のお世話をしたり、友だちになってやったりすると、交流センターは不必要になるかも知れない。これはやり出すまでは大変であろうが、こちらの学生のためにも役に立つことであろうと思われる。交流といっても、その本当の中身は「お世話をしたり、されたりすること」以外にはないのであるから。

これが出来るようになったら、「任務完了」ということになろうか。

私は30年前にウィスコンシンに遊んだが、国際交流の部屋だの担当者なんかなかった。皆がよってたかってお世話をしてくれた。これが、「文化の違い」かなと思うことがある。その頃、教育心理学研究室のお世話になったが、秘書の方が何やかやと研究室や事務用品までお世話してくれるかと思うと、今度は先生方が昼食に誘ってくれるし、夕食に招待してくれる。友だちはぐんぐん増えて心配になる位。担当箱には新聞の切り抜きが入っていて、日本関係のものがあつたから読んでくれという、誰からのものともわからないメモ。向こうの連中は一般に威張ってなんかいないし、(たまにはいるが)、百年の知己みたいに壁がなくて、直ちに仲間として入って行くことができた。困ったことがあると、もういいという程に世話をしてくれた。Bob Ingle (教育心理学科長)は毎朝私を下宿から大学に車で拾ってくれたし、Robin (学生)は毎日大学から下宿ま

まで車で送り届けてくれた。これはどう考えても（日本人の常識では）出来ないことである。

とにかく、このようにして私は容易に仲間に入れて貰うことが出来たのであるが、これも‘文化の相違’であろうか。ともあれ、私のミルウォーキーに対する信頼は生涯変わらないと思うし、Bob Ingle, Robin にもしもの事があれば、直ちに飛んで行かねばと思うこの頃である。

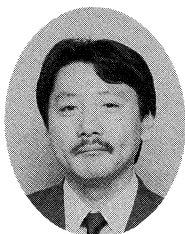
今週のNewsweek (Nov.15,1993) を読んでみると、シンガポールでは今でも日本を本当に信頼出来ないと考えている人がいるようである。たとえ日本が国連安保理事会の理事国になったとしても、‘I don't think Japan would speak for Asia. Japan would only speak for Japan.’ という意見の指摘があり、淋しく思う。アジアの国々は、指導者としての日本ではなくて、Partnerとしての、よき協調者としての日本、友人としての日本を期待している。

今の日本では、物価は高いし、狭い国だし、交流センターの人手もたりないが、外国からの友人を私たちの中に包み込んで、‘よい思い出’を残してやる何か方法がありそうなものだと考えている。

ここでも、やはり、前提となるのは人を思いやる‘暖かさ’とそれを示す‘行動’かな。

(1993年12月執筆)

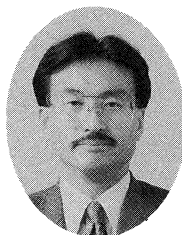
* * * * *



新国際交流委員長に 勝部伸夫先生就任！

年末の役職員選挙で新しい国際交流委員長に勝部伸夫先生が選出され、平成6年1月1日付で就任された（任期は2年）。勝部新委員長は平成3年3月～平成4年2月まで韓国大田大学校交換教員として滞韓の経歴を有し、現在商学部経営学科の助教授で企業形態論の講義及び演習を担当され、十分な体力と熱意の持主でもあり、大きな活躍が期待されている。

(1994年1月執筆)



前国際交流委員長の 古田龍助先生は商学 部経営学科長に就任

前国際交流委員長の古田龍助先生は、同じく年末の役職員選挙で商学部経営学科長に選出されて、経営学科の仕事を担当されることとなった。今後は教学サイドから国際交流活動をご支援いただくことになり、多忙な日々からはなかなか解放されず、当分今まで通りの超スケジュールが続きそうだ。健康に留意されてのご奮闘をお願いしたい。

(1994年1月執筆)

MSU研修団6年ぶりに来学

教養部助教授（実行委員長） 堀 正 広

5月18日（火）午後8時、福岡空港の到着ロビーからこちらにピースサインをしているクリフ・モンティン先生の姿が見える。ついにやってきた。出迎えた我々は、9ヶ月ぶりの再会を喜ぶ。しばらくして、もう一人の引率教授のデボラ・ライシュマン先生と共に、長旅の疲れなど全く見えない12名の学生たちがやってくる。

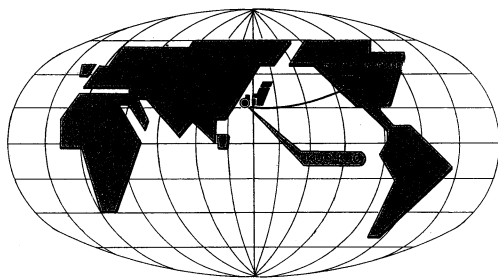
第1回目の実行委員会が1月に開かれたとき、モンタナ研修団は学生が30名、引率教員が3名の予定だった。しかし、折からの円高も影響して、モンタナからのファックスが届くたびに研修団の数は減っていった。モンタナから最終的な人数と旅程の要望書が届いたのは、出発日の3週間前だった。

今回のプログラムは、これまで以上に多彩な内容だった。彼らにとって日本での1ヶ月は、毎日毎日が驚きと感動の連続だったに違いない。彼らは1日の行事が終わると、その日の感想を、時には引率者と討論をしまとめていた。おおむね彼らの日本での異文化体験は好評だった。ただ、禅体験だけは勝手が違っていただいようだ。合理的で相対的な思考の世界に生きている彼ら（実は、現代の日本人も同様なのだが）にとって、東洋的な無や三昧や無功徳の実践は、単なる形式的な作法でナンセンスな行為に思えたかもしれない。しかし、友好と相互理解の日本体験だけでなく、現在の彼らの理解を越えた世界の体験もまた、重要な国際交流の一面だと思える。

思えば、実行委員会のメンバーや国際交流センターのスタッフには、職務を越えて実に献身的な仕事をしていただいた。国際交流を日常化の軌道に載せるという点から言えば、問題がなかったわけではない。しかし、真の国際交流はこのような人々の努力によって支えられ、築かれていくのだろう。古句に、「尋常一様窓前の月、僅かに梅花有れば即ち同じからず」というのがある。骨折りという一輪の梅花を添えることは、ありきたりの交流を確かで、心温まるものにするのではなかろうか。

最後に、今回のプログラムでは多くの学外の方々にお世話になった。県・市・県内の各企業・団体、そしてホームステイをさせていただいた方々、特に御船町訪問ではまさに町ぐるみの大歓迎を受けた。紙面を借りて、あらためてお礼申し上げると同時に、更に今後とも熊本学園の国際交流プログラムへのご協力をお願いしたいものである。

（1993年11月執筆）



今、ここに、只存在する？

マーケティング専攻 シェルビー・カークスイー

正直なところ、私には禅をする理由がわかりません。何もしないで、窮屈な姿勢で坐っているのはとても変な気がします。こんな気持ちになるのは、きっと私がアメリカ人だからでしょう。私は何かの目的のために、いつも何かしていたくて、決して時間を無駄にすることはありません。静かに坐っていたいと思う時は、本を読んだり、テレビを観たりして、私の心はいつも何かに取り組んでいます。もし何もしないでただ坐っていたい時は休養し、エネルギーを蓄えるためにうたた寝をします。しかし、エネルギーを浪費して、目を開けて座っているだけということはありません。私はいつも何かしているのが好きなのです。単に座っているだけの時でも、何か考えたり、計画を立てたり、心の中だけであって

も何かをしていることが私には重要なことなのです。ですから、何も考えず数を数えながら坐っているのは、私にとって非常に難しいことでした。食事の時間も変わったものでした。私にとって食事の時間はいつも友人や家族との団欒の時です。草むしりをしたときも同じように感じました。私はいつも、おしゃべりすることで仕事を楽に過ごせるようにしているのです。坐禅や食事や草取りの一つ一つの行為に、「今、ここにただ存在する」ということは、私には奇妙に思えるのですが、忍耐という点では、これはいい経験だったと思います。ひょっとすると、禅の目的というのは、体と心をコントロールするやり方を学ぶことなのかもしれませんが、私には、精神的機能の浪費に思えます。

沈黙と感動

ビジネス学部教授 デボラ・ライシュマン

チベット仏教では、瞑想の時は、決められた場所内を自由に動くことが許されています。これは個人に自己心の発見を任せているからです。それに比べ、禅仏教では不動の姿勢をとります。心は瞬間、瞬間に応じて活動しているので、どちらかの修行が正しくて、どちらかの修行が間違っているということがあるのでしょいか。

この短い禅体験は大変素晴らしいものでした。これほどおいしい食事、これほど充実した作務も、これほど心地好い睡眠もこれまで経験したことがありませんでした。このような素晴らしい機会を与えていただき大変有難く思っています。特に禅道についていろいろと教えてくださった皆様方に感謝しています。有難いことに日本人の学生たちも一緒に参加してくれました。この貴重な体験を通

して、私たちは彼らから、そして彼らと共に学び、衆生としてお互いに助け合いました。

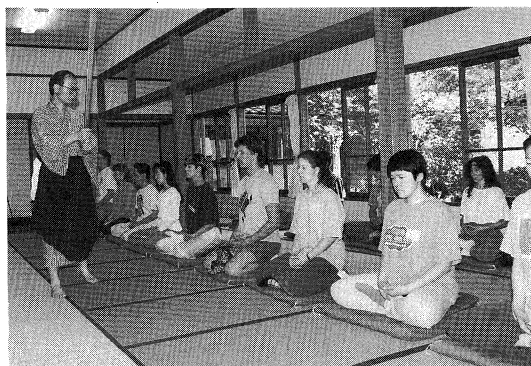
私はこれまで以上に禅修行のすばらしさが分かったような気がします。沈黙、姿勢、数息観、作務などについて、懇切丁寧に指導をしていただきました。特に印象深かった体験は沈黙の中での食事でした。質素ながら栄養を考えた食事や給仕をしていただいた方々の細やかな気遣いに対して、私は涙が出そうなほど感動しました。

帰り際、学生たちは別人のように見えました。それぞれに深い感銘を受けたようです。この体験学習はきっと彼らの心の中に長く残ることでしょう。

合掌



裁判所訪問



“禅”体験

モンタナ研修団引率者・学生名簿

引率者氏名	性別	所 属
Cliff Montagne (クリフ・モンテイン)	男性	農学部教授 (土壌学)
Deborah Reichman (デボラ・ライシュマン)	女性	ビジネス学部教授 (弁護士)

学生氏名 (男子6名・女子6名)	性別	年 齢	専 攻
Kelley Arnone (ケリー・アーノン)	女性	25	ドイツ語・商学
Gina Curtiss (ジーナ・カーティス)	女性	21	マーケティング
Charmaine Dawson (シャーマイン・ドーソン)	女性	40	スペイン語
Andrew Farris (アンドリュー・ファリス)	男性	18	一般教養
James Garlitz (ジェイムズ・ガーリッツ)	男性	22	物理学・数学
Linda Gerwin (リンダ・ガーウィン)	女性	22	会計学
Shelby Kirksey (シェルビー・カークスィー)	女性	22	ビジネス・マーケティング
Brandon Lewis (ブランドン・ルイス)	男性	20	農業ビジネス
Paul Niederegger (ポール・ナイドレガー)	男性	20	農業ビジネス
Brett Robot (ブレット・ロボット)	男性	27	メディア・劇場芸術
Crosbie Ronning (クロスビー・ロニング)	女性	19	一般教養
Corey Shilliday (コーリー・シリデイ)	男性	22	土壌学

モンタナ研修団滞在日程表

月日(曜)	行 程	宿 泊 先
5/17(月)	モンタナ出発	
18(火)	午後7時25分 福岡空港到着 (KE734便)	熊本県青年会館
19(水)	午前中休憩・午後 来学・夕刻 歓迎夕食会	"
20(木)	終日自由	"
21(金)	日本語授業・講義・堀先生ゼミ参加	"
22(土)	新図書館起工式参加 学生との交流会	ホームステイ
23(日)	終日自由	"
24(月)	日本語授業・講義・裁判所訪問	"
25(火)	日本語授業・講義・RKK・県庁訪問	"
26(水)	日本語授業・講義・市役所訪問	"
27(木)	日本語授業・講義・午後自由	熊本県青年会館
28(金)	熊本→広島→京都	京花旅館
29(土)	京都観光	"
30(日)	京都→東京	ユースホステル
31(月)	東京観光	"
6/1(火)	東京→長野/京都	" / 京花旅館
2(水)	安曇野散策/京都観光	" / "
3(木)	長野/京都→熊本	西合志研修所
4(金)	自由活動 (アルコール工場見学・ホームステイ等)	"
5(土)	終日自由	"
6(日)	農場訪問 (田植え)	"
7(月)	午前 養生園訪問 午後 本田技研訪問	"
8(火)	昼間 自由活動 夕刻 禅道場へ	禅 道 場
9(水)	禅道場での活動 午後自由	西合志研修所
10(木)	JA菊池訪問	JA教育センター
11(金)		ホームステイ
12(土)	御船町訪問	"
13(日)		熊本県青年会館
14(月)	九州東海大学訪問・夕刻 お別れ会	"
15(火)	終日自由	"
16(水)	午前10時 福岡空港出発 (KE733便)	

特別講義

- ・日本語授業 (第1時限 9:00~10:30 講師:小貫眞理子先生)
- ・英語での特別講義 (第2時限 10:40~12:10)

月日(曜)	講 師 氏 名	講 義 題 目 (予定)
5/21(金)	カーク・マスデン先生	文化と教育の日米比較
5/24(月)	慶田 收 先生	日本の土地に関する経済
5/25(火)	中野 裕治 先生	日本企業の組織
5/26(水)	朴 哲 洙 先生	日本経済と産業経済
5/27(木)	古田 龍助 先生	日本企業特有の企業戦略

新科目「日本事情特講」開講

——国際交流プログラムとの関係で——

英国リバプール・ジョン・モーズ大学との学生交流に基づき、本学ではリバプール・ジョン・モーズ大学からの交換留学生のために留学の1年間の前半を日本語・日本事情の学習に充て、後半は日本社会・産業・企業に関する特別コースの受講と週1回程度の企業研修に充てることにした。

国際交流委員会が学部長会へ提案し、昨年12月16日の教授会へは学部長提案として了承された。

早速、日本社会、産業、企業に関する複数の教員による英語での講義が平成5年度から日本事情特講（前期のみ、2単位）として開設されることになり本学学生も受講した。

担 当 者	題 目
朴 哲洙・経済学部講師	日本経済と産業経済
慶田 収・経済学部教授	日本の土地に関する経済
中野裕治・商学部教授	日本企業の組織
安田義郎・商学部助教授	日本の株式市場
古田龍助・商学部教授	日本企業特有の企業戦略

第4回 甲南イリノイ学生研修団来学

甲南大学に1年間のプログラムで留学中の学生研修団が、フィールドトリップの最終地として毎年4月下旬に本学を訪問することも恒例行事となってきた。今年度も4月21日から3泊4日の日程で来熊、本学教職員や学生の家庭でホームステイを体験したり、新入生歓迎ピクニック（グリーンピア南阿蘇）に参加したりなど、それぞれ交流を深めた。また、今回は、引率の先生方と共に甲南大学の湯浅学長も来学、岩野学長、園田学長との会談の上、ピクニックにも足を運ばれ、研修団と本学の学生達との交流に親しく目を注がれていた。

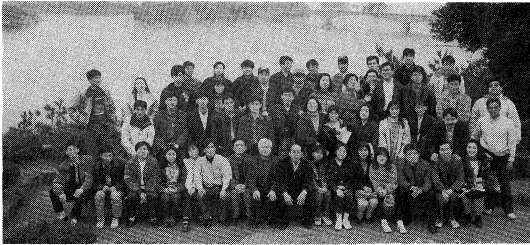
今年も、両校の学生達の良い思い出が築かれたことと確信している。



新歓ピクニックで交流

第6回大田大学校学生訪問団来学

韓国・大田大学校からの学生研修団も、今年で第6回目をかぞえる。今回は、昨年交換教員で滞在されていた法経大学長の鄭鳳輝先生を団長とする引率職員7名と学生23名の皆さんが来熊した。研修団員の学生さんの中には、初めての訪日で新しい出会いを体験した方や前年9月に本学から第2回大田大学校訪問学生研修団で訪韓した学生との再会を果たした方もあった。ホームステイを通しての心あふれる交流に、大田大学校での再会を約束する姿が印象的であった。



天草での一日

第6回 大田大学校学生研修団滞在日程表

月/日	行 程	宿 泊
2/10 (水)	訪日 (韓国・釜山→日本・福岡) 太宰府天満宮参観 来学 歓迎夕食会	青年会館
2/11 (木)	天草観光	ホームステイ
2/12 (金)	熊本城・水前寺公園見学 キャンパス見学・大学紹介ビデオ 送別夕食会	青年会館
2/13(土) 2/14(日)	離熊 離日 (日本・福岡→韓国・釜山)	

ホストファミリーをして

国際経済学科3年 竹山 功一

僕の家^{ユン}にホームステイしたのは、尹徳祺さんという土木工学科の三年生でした。三年生といっても韓国では、普通、男の学生は、二年間大学へ通った後、軍隊に行き、三年生になるそうなので、僕よりもだいぶ年上でした。

最初紹介されて、あいさつはできたものの言葉は通じないし、何を話していいのかも分かりませんでした。

それから晩ごはんを食べに街へ行き、色々考えて、鍋を食べに行きました。韓国にも鍋はあるようですがもちろんとても辛いそうです。

それからみんなで集まって飲みに行き、家に帰りついたのは夜中の2時すぎでした。次の日はバス旅行だったので朝9時半に学校へ行かねばならないと言うのに、もうその頃にはすっかりうちとけて、話に夢中になり、ほとんど眠らずに学校へ行くハメになってしまいました。言葉は通じませんが、英語も日本語も韓国語もすべて使い、それでも通じなければ漢字やジェスチャーで話しました。お互いに、一生懸命伝えよう、わかろうとすればわかり合える、ということをも身をもって感じました。

家へ泊まったのは1泊だけでしたが、昼はバスで見学旅行に行き、夜はホテルに大勢で押しかけたりして、徳祺さんだけでなく大勢の人と友達になり、最後の夜は、大きわざでした。

そして、おみやげに何かあげようと考えて無事にもってかえられるかどうか心配でしたが、宮沢りえの写真集を贈りました。

去年の夏、国経の研修で韓国へ行きました。初めはアメリカに行こうと思っていたのですが、ホストファミリーをして本当に楽しかったし、またたくさんの友達ができ、韓国へ行くことにしたのです。

そして韓国での研修中にホームステイがあり、なんと僕は徳祺さんの家へ泊りました。僕の一ヶ月の滞在中に何度も来てくれ、いろんな所に連れて行ってくれました。

本当に、こういう貴重な体験ができ、感激しました。

ちなみに僕があげた写真集は無事にもって帰れたそうですが、はずかしくて誰にもみせずに、家にかくしているそうです。

第2回 大田大学校経営行政大学院研修団来学

本学の姉妹大学である韓国・大田大学校経営行政大学院（院長：具本璋教授）より研修団一行46名が6月8日に来学し、特別講義を受講した。

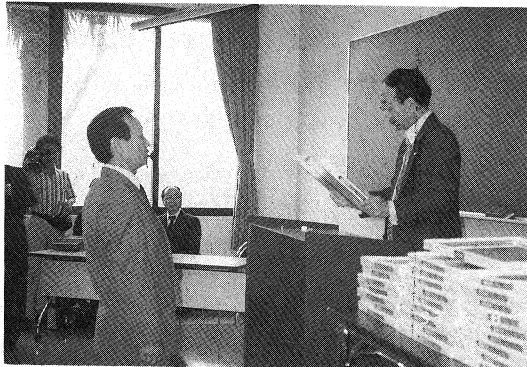
経営行政大学院は同大に3年前に設立され、経営と行政の有能な管理者を教育するため、上級公務員と経営管理現職者に多様なプログラムを提供している。

同研修団はカリキュラムに基づく海外研修プログラムの一環として本学を訪問したもので、平成3年に続いて今回で2回目。

6月8日は小島恒久・経済学部教授が「戦後日本経済の歩みと現状」、中野裕治・商学部教授が「日本型経営の普遍性と特殊性」と題して、それぞれ講義を行った。ほとんどが企業や行政の上級管理者等である大学院生は

熱心に講義に聞き入っていた。大学院長の具本璋教授は「有意義な講義を受講することができ、来年も是非訪問したい。」と感想を述べていた。

講義終了後、岩野茂道商大学長が受講生全員に修了証書をひとりひとりに手渡した。



修了証書交付式

韓国大学生訪日研修団のホームステイ交流

7月3日から5日の2泊3日の日程で、熊本県国際課からの依頼を受け、本学の学生と韓国全土の大学生27名で構成された訪日研修団との交流会が行われた。

これは、外務省からの委託を受けた「日韓文化交流基金」によって主催されており、日本でのホームステイや企業視察等を通して地方の活動及び国民の実生活に触れ、日韓相互理解の増進を目的としたものである。熊本では、テクリポリスセンター視察や伝統工芸館等の見学の後、本学を参観。当日夜、市内のホテルでのホストファミリーとの交流会から、5日の朝までをそれぞれ本学の学生と過ごした。

今回の交流会は、これまで大田大学校訪問学生研修団、国際経済学科の外国事情研修参

加者や学生で組織している大韓倶楽部のメンバー等27名の学生がホストファミリーとなった。

熊本では短い交流期間であったが、5日離熊の朝には別れがたい思いからいつまでも握手の手を離さない学生達の姿が印象的であった。



韓国語版大学紹介ビデオを見る研修団員

大田大学校職員研修団来学

従来型の研修は、種々の交流プログラムで来学の機会ごとに職員の皆さんが寸暇を惜しんで、日頃の疑問点について、実際に自分の目で見、手で触れ、写真を撮り、資料収集をするスタイルが多かった。

しかし、今回は職員だけの独立した研修団として7月5日（月）～14日（水）（10日間）に渡るスケジュールでの来学となった。

受入れ側の本学事務局でも、山下事務局長を中心に部課長会が積極的に研修プログラムの企画・立案から実施に到るまでを担当することになり、韓国語の堪能な職員、言葉の壁を乗り越えて奮戦する職員等々、本学職員の自己研鑽にも？

韓国から本学へ留学している学生の心暖まる支援通訳で合同研修、部門別研修と順調にプログラムは展開された。

4名の職員研修団は課長1名、係長3名の中間管理者で大田大学校では学籍課・管理課・電算課・司書課に所属し、事務の合理化・効率化を率先垂範している優秀な方々ばかりである。

大田大学校職員の研修に対する熱意と、本学職員の懇切丁寧な指導にホットな研修交流が確かな実を結んだようだ。



本学事務局との合同研修

大田大学校職員研修団員名簿

所 属	職責	姓 名	読み方
教務處 学籍課	係長	孫 宇 柱	ソン ウ ジュ
事務處 管理課	係長	朴 柱 炯	パク ジュ ヒョン
電 算 課	係長	崔 丙 夏	チュ ビョン ハ
図書館 司書課	課長	池 容 求	チ ヨン グ

研修内容

合同研修 Computer項目
1. 教学：図書館・サービス部門 2. 管理運営部門
財産管理分野研修項目
1. 施設管理
学籍管理分野研修項目
1. 学籍移動 (入学登録～学籍移動～卒業・住所管理) 2. 証明書発行 3. 学生数統計 4. デモ 5. 質疑応答
電算分野研修項目
1. 機種を選定等・授業の補助 2. 学生へのサービス・講習会 3. 質疑応答
図書館管理分野研修項目
1. 図書管理…雑誌以外の図書の発注・受入 2. 書誌管理…書誌情報の保安(目録処理) 3. 雑誌管理…雑誌全般の発注・受入 4. 閲覧管理…図書等の貸出・返却・予約 5. 検索管理…図書等の検索 6. 学術情報センター目録システム …共通データの共同利用

1993年度国際経済学科「外国事情研修」を終えて

国際経済学科の外国事情研修も第二回目を迎えた。昨年度の反省にたち新たないくつかの試みをふくめて米国コース（モンタナ州立大学、モンタナ大学、キャロル大学）中国コース（深圳大学）、そして本年度から韓国コース（大田大学校）を加え三つのコースに分かれて行われた。本年度の一番新たな試みとしては、引率教員を最小人数に抑え（米国・岡本経済学部長、中国・永井先生（前）、笹山先生（後）、韓国・朴先生）各コースとも学生リーダーを配し、学生の自主性をできるだけ引き出すように考慮された点であろう。初回の説明会では、なぜ自分が選ばれたのか分からないといった戸惑いさえ感じとられた彼らではあったが、事前研修、自主勉強会と進んでいくうちにみるみる積極的に頼りがいのあるリーダーに成長し、彼らが、自分達で自ら作成したしおりを手に各研修先に出発するときには、健康面のわずかな配慮以外殆ど心配ないように思われるほどであった。

各研修先（別表1）では、その土地柄を生かした、テコンドー（韓国）や太極拳（中国）、フィールドトリップ（米国）などを盛り込んだ特色のある講義が展開され、学生達は、単なる机上の論理だけでなく体全体でこの研修の意義を理解することができたことだろう。（別表3、韓国コース参照）特に、韓国コース（大田大学校）は、初回の外国事情研修ということもあって、研修受け入れ先である大田大学校の体制は、予想をはるかに上回る温かいものであって、引率の先生を始めどの学生も口々にすばらしかったとの感想を述べていた。本年度は、13名という他のコースと比べて小人数であったが、この先より一層、韓国コースも充実していくと期待される。

'94年度は、単位履修数が従来の4単位から6単位（演習4単位、講義2単位）に膨らみ、より一層外国事情研修は国際経済学科の主要な科目として発展していくことだろう。さらに、研修後の学生における研修効果をさらに拡げるために、現行の3年次から2年次に移行して実施されることとなる。'94年度は、その学年移行年にあたり2、3年生を送り出すことによる煩雑さもあるだろうが、この2学年にわたることで生じる副産物もあることが期待される。

（別表1）1993年度外国事情研修参加者数

米国コース	参加者数	中国コース	参加者数
モンタナ州立大学	26名	深圳大学	40名
モンタナ大学	25名	韓国コース	参加者数
キャロル大学	29名	大田大学校	13名

1993年度 外国事情研修日程表

(別表2)

日時(曜日)	米 国	韓 国	中 国
7/15(木)	商大発 10:00 福岡空港発14:00 成田空港発17:20 LA着 11:15 ユニバーサルスタジオ見学		
7/16(金)	LA滞在 Disneyland		
7/17(土)	① ② ③ LA発 17:14、7:10、7:10 SLC着20:26、9:58、9:58 モンタナ着22:20、12:20、13:39 入 寮		
7/18(日)	オリエンテーション	商大発 6:00 福岡空港発10:00 ソウル着 11:20 大田大学校入所(午後)	
7/19(月)	研修開始	研修開始	
7/27(火)			商大発6:00 福岡空港発10:40 香港着13:00 香港発15:30 深圳着16:15
7/28(水)			研修開始
8/11(水)	研修終了		
8/12(木)	① ② ③ モンタナ発7:00、7:00、7:05 SLC着7:59、8:12、8:14 LA着 9:17、9:43、9:43 LA発 12:00		
8/13(金)	成田空港着15:15 成田空港発17:55 福岡空港着19:45 熊本着 22:30	研修終了	
8/14(土)		大田発 慶州見学 慶州泊	
8/15(日)		釜山見学 釜山泊	
8/16(月)		釜山発12:20 福岡空港着13:05 商大着	
8/25(水)			研修終了
8/26(木)			深圳発10:45 香港着11:30 ホテル泊
8/27(金)			香港見学 香港発13:55 福岡空港着18:00 熊本着21:00

(注) ①はモンタナ州立大学 ②はモンタナ大学 ③はキャロル大学

(別表3) 大田大学校(第2週)研修時間割り

時 間	月 日	7. 25	7. 26	7. 27	7. 28	7. 29	7. 30	7. 31
	曜 日	日	月	火	水	木	金	土
7:00~7:30		休憩	テコンドー	テコンドー	テコンドー	テコンドー	テコンドー	親善
9:00~10:20			韓国語Ⅰ	韓国語Ⅰ	韓国語Ⅰ	韓国語Ⅱ	韓国語Ⅱ	運動競技
10:30~11:50			"	"	"	"	韓日経済比較論	
14:00~15:20			韓国 地方自治	陶芸地 見学	韓国 貿易論	韓国労使 関係論	大屯山 登山	
15:30~16:50			"	"	"	"	"	

中国コース



国際貿易ビルフロアーにて

外国事情研修の引率をして

ボストン大学経済学部修士課程 梶 永 佳 甫

今年の7月15日から8月13日までの約1ヶ月間、外国事情研修米国コースの引率としてモンタナの首都であるヘレナにあるキャロル大学に滞在しました。私は商大3年の時、1年間の交換留学生としてモンタナに滞在していましたので久しぶりのモンタナということもあり、また今回は引率としての渡米ということもあり少々緊張していましたが、昔と変

わらないモンタナに緊張もすぐほぐれました。

私と対照的に学生のほとんどは今回が初めての渡米ということでかなり緊張していたようです。私の引率するキャロル大学に行く学生も例外ではありません。しかし、ヘレナに滞在して1週間も立つと、英語で何とかコミュニケーションしてやろうという意気込みを全ての学生が持ち、中には現地の学生とスポーツやダンスパーティを通して交流するもの、恋をするものなどもいて学生はアメリカの生活にすぐに容易に溶け込むことが出来たようです。

そのような訳で帰国の日には感無量になる学生がほとんどでした。私の後輩の彼らの中には私がかつてそうであったように滞在時の感動を忘れず、その時の感動を動力としてまた渡米するための努力をしようと決心したのも沢山いたと思います。

(1993年8月執筆)



第3回大田大学校訪問学生研修団

熊本短期大学教授(団長) 今井 義 量

本年で第3回となった大田大学校訪問研修は引率教職員3名(今井、北原、切通)と学生20名によって9月1日から一週間の日程で実施された。大田での第一日は独立記念館に案内され、翌日は折りしも開催中の大田EXPOの見学にあてられた。ホテルでオンドル部屋を割り当てられた学生もあり、そこでの3泊はきつかったという声もあったが、宿を訪れる韓国の学生との交流には好都合であったといえよう。ソウルでは予定外に民俗博物館の見学があり、また希望者によるロッテワールドの夜があった。国立博物館である

元朝鮮総督府の壮大な建物は王宮の再建のため本年度を最後とし取り壊され縮小して移築されるという。朝鮮総督の異様な権勢を物語るものとして、そのままを日本で引き取れないものかと思う。ソウル出発前に大田に忘れてきた女子学生の帽子が無事に届けられ、旅の思い出を完璧なものにした。また日本や大田でのかつての韓国学生が旧交を求めて訪れるなど、心暖まる交流が年を越えて実り行くことを感じる旅であった。

(1993年10月執筆)

研 修 団 日 程 表

期 日	行 程	宿 泊
9/1 (水)	12:00 本学出発 14:30 博多港到着 [大学バス] 17:00 博多港出発 [フェリー]	船 上 泊
9/2 (木)	9:00 釜山港着 10:30 釜山港発 [バス] 釜山市内見学(釜山タワー) 12:00 慶州到着・見学 [バス]	[慶州泊] 現代ホテル
9/3 (金)	午 前 慶州見学 慶州出発 [バス] 16:00 大田大学校到着	ホームステイ
9/4 (土)	午 前 独立記念館見学 [大学バス] 午 後 自由行動	[大田泊] セ・ソウル ホテル
9/5 (日)	終 日 大田EXPO [大学バス]	[大田泊] セ・ソウル ホテル
9/6 (月)	午 前 大田出発 [バス] 午 後 ソウル到着・見学 [バス] ・景福宮見学等	[ソウル泊]
9/7 (火)	午 前 ソウル市内見学 [バス] ・国立中央博物館見学 ・南大門市場見学等 18:45 KE734 金浦国際空港発 20:00 福岡空港着 22:30 大学着 [大学バス]	



大田EXPO'93 ハンビタップの前にて

韓国研修を終えて

商学科4年 沢部俊明

あなたは、大田大学校訪問学生研修団という制度が商大・短大にあるのを知っていますか？ 私は、この大学に4年間もいながら全く知りませんでした。大学生生活も今年で最後、どこか海外でもいきたいなあ。始めは、そんな軽い気持ちでの参加でした。

研修の内容をざっと説明すると、ホームスティ1泊を含む6泊7日であり、釜山、慶州、大田大学校、ソウル、そして独立記念館を見学しました。今年は、大田EXPOを見られるというおまけつきでした。

この研修団の1番の目的は、私自身“1人でも多くの韓国の友達をつくること”と思っていたのですが、これがなかなか大変でした。韓国語は研修前に少し勉強しただけだったので、挨拶程度しか使えず、へたくそな英語とボディランゲイジだけでは、自分の考えを上手く伝える事ができませんでした。とても口惜しかったです。せっかく、同じ趣味を持っている韓国の学生がいながら、そんなに深くは仲良くなれず、とても残念でした。

過去の出来事のために近くて遠い国になってしまった韓国と日本ですが、韓国人は、髪の毛の色も、目の色も私たちとまったく同じであり、私と同じように女好きで、ちょっとエッチでした。

ただ、生まれてきた国が違うだけで、言葉さえ話せば…独立記念館を見学する前までは、そう思っていました。

この博物館で、一番印象に残っているのは、小さな窓をのぞくと、旧日本軍が、行っていた残虐な行為が実物大の生々しい人形で再現されているものでした。想像して下さい、韓国の方々の中でそれを見るんですよ。自分が日本人であることが、いやになりました。しかし、見学後に一緒に同行してくれた韓国の学生がこう言ってくれました。「過去は過去、僕たち、若い世代は、もっと未来を見つめなければいけない。もっと近くて近い国にならなければいけない。これから、一緒に世界のリーダーになれるよう頑張ろうじゃないか。」その言葉に、本当に助けられました。

言葉だけでなく、お互いに勉強しなきゃいけない事は、多いなと思いました。

こんな素晴らしい研修を企画してくれた、国際交流センターの方々、本当にありがとうございました。そして、一緒に頑張った研修団のメンバーのみんな、いつまでも仲良くいようね。

追伸

何の目的もなしに、学生生活を送っている人たち、ぜひ、参加して下さい。何か必ず得るものがあるはずです。もちろんこの文を読んだ人は全員ですよ。

(1993年10月執筆)

第3回外国人留学生弁論大会

第3回『外国人留学生弁論大会』は、5ヶ国から10名の参加者により、学内・学外から多くの方々の支持を得て今年も大盛況のうちに幕を閉じた。聴衆の皆さんや審査員からは、弁論内容、弁論技術ともに年々充実しているとの評も聞かれ最後まで誰が最優秀賞を獲得するのかわからないほどであった。今年は、第3回大田大学校訪問学生研修団に参加した熊本商科大学商学部2年生の松本尚子さんにも協力を依頼し、参加留学生のプロフィール紹介を担当していただいた。

11月17日、午後3時40分。満席で賑わう会場1131教室は、開会と同時に緊張した空気に包まれた。トップをきって、中国深圳大学からの交換留学生の吳焯さんが『異国と接する時の気持ちの持ち方』を弁論。身振り手振りを交えながら、物事を国や民族への先入感ではかるのはおかしいとの弁論は、多くの聴衆の共感を得た。熊本短期大学教養科の学科研究留学生劉凱玲さんは、銭湯に集まるはだかの日本人グループからの疎外感を日本文化の体験談として弁論。真剣な弁論であればあるほどに、劉さんの異文化体験は、会場を終始笑いの渦にまきこんだ。

最優秀賞は、中国深圳大学からの交換留学生で商学部経営学科所属の尤梅さんによる『今の時代における若者の役割』に輝いた。「人生は一度しかない、かけがえのないチャンスだから、いつでも、どんな事でも、自信を持って、悔いを残さずチャレンジしようと言う積極的な人生態度が必要だと思います。」力強い弁論は、審査委員そして会場につめかけた聴衆の一致した評価での受賞であった。

回を重ねるごとに、大会会場の顔ぶれから学生や学内からの聴衆はもちろんのこと、市民の方々や友好交流団体等の地域の皆様の支

持を得てこの弁論大会が開催されていることを実感させられる。

この弁論大会が、留学生にとっても、日本人にとっても自己の自国の再発見の契機となり、そこから相互理解と交流を深めてゆくことができればと願う。



〈最優秀賞〉

経営学科4年・深圳大学交換留学生
尤 梅 (中国)

「今の時代における若者の役割」

〈優秀賞〉

大学院商学研究科1年
応 鳴 一 (中国)

「歴史から何を学ぶか」

経営学科2年

梁 湖 南 (韓国)

「私にとっての日本」

〈特別賞〉

教養科研究留学生

劉 凱 玲 (中国)

「日本に来て感じたことー銭湯で思ったこと」

経営学科研究留学生

マニッシュ K ミシュラ (インド)

「鏡の中の自分」

交換教授姉妹校滞在印象記

大田大学校滞在印象記

熊本商科大学助教授 北原明彦

大田大学校は太田市のヨンウンドン（龍雲洞）という地域に位置する総合大学である。

第一に韓国の人々が山を非常に愛する国民であることに気づく。サンチェック（散策）と称しては、午後の暇な時間に同僚と裏山を散策する様は、韓国独特の雰囲気がある。山といっても散策に適した高さしかないが、それでも結構良い運動になる。山は親族で共有され土葬の墓地が点在し、また山の中腹には湧水が見られ、そこかしこに点在しコンクリートで整備された源泉から湧き出るヤクス（薬水）がまた散歩の疲れを癒す。

山を愛するがゆえに山の上に位置する大田大学校はさらに威厳を備えることになる。

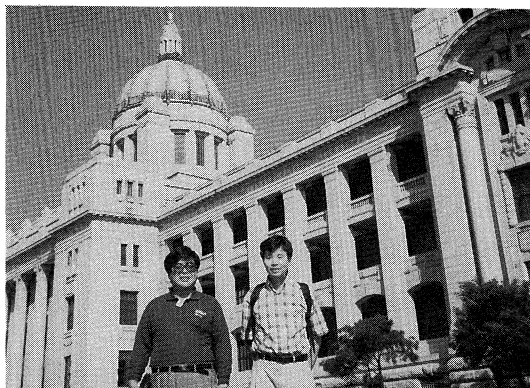
第二に韓国の人間関係が儒教的精神に裏打ちされつつ、どこか家族的・共同体的であり、きめ細かな配慮が互いになさされていて、優しい心の持ち主が多いということである。教授は教授で仲良く親しみ、学生は学生で親しむという横断的な非公式の互助組織が存在するように見える。そして教授と学生の関係は「礼」によって律せられ、教授の「仁」と学生の「孝」が維持されているようである。学生の中にも兄と弟、姉と妹という関係が成立し、親しい間にも年齢による秩序は存在し年長者は若年者の面倒を良く見る。

大田大学校の学生の雰囲気はほぼ本学と似ているが、親しく協力し合う非公式の組織は韓国文化を反映しておそらく、大田大学校の方がダイナミックかもしれない。

大田大学校はハンニハック（韓医学）でも有名な大学であり、市内に立派な病院があり交換教授として赴任するには何の心配もないことを付記して滞在印象記とします。

（1994年1月執筆）

〔1992年8月～1993年1月 大田大学校滞在〕



ソウルの国立中央博物館にて（筆者は左）

高度成長下の深圳の印象

熊本商科大学教授 嶋 啓

「バナナ畑……火焰のような花で輝やく鳳凰樹……水に浮いた水牛」、1957年初夏まだ国交のない中国へ香港経由で入った野上彌生子は、車窓から見た深圳をこう描いている。（『私の中国旅行』）。爾来30余年、かつての田園地帯は今や、高層ビルのたち並ぶ「もう1

つの香港」を思わせる大都会に変貌した。数年のうちには、88階の東洋一のビルも完成する。この深圳の高度成長の姿は、次のような数値で示される。

〔経済成長率——%——〕

1984年28.6, 1985年41.8, 1986年6.9, 1987年25.4, 1988年17.6,

〔一人当たりGNP——1987年——〕

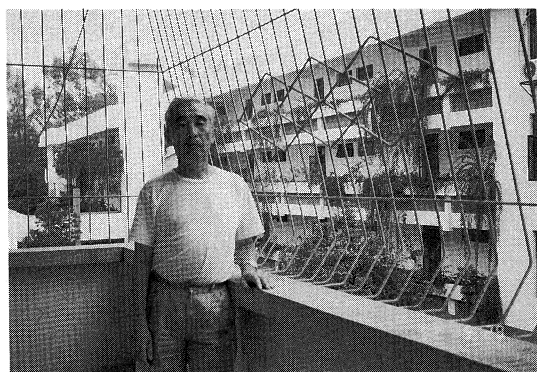
1184ドル。これは韓国の3分の1強、香港の6分の1弱、台湾の4分の1弱である。

〔産業構造——1986年、%——〕

第1次産業9.2 (36), 第2次43.6 (40.6), 第3次47.2 (23.4)。()内は全中国。(張敬和・黄定国論文『深圳大学学报』1991-2)。

深圳の古い商店街にはいくつか市場があり、野菜も肉も魚もあふれるばかりに豊富である。生きた蛇、鶏、大鯰も。その2階には、100軒をこえる衣料品店が並び、市場経済の下での郷鎮企業 (rural industry) の発展を思わせる。

だが、深圳にはもう1つ別の目立った商店がある。駅構内やホテルの店には、スイス製



鉄格子のある外人宿舎。かって財布をホテルのロビーに忘れても必ずもどってきた、という中国も、こんな防犯設備が必要になった。

高級時計や中国製の高価な陶磁器、絹製品などが並んでいる。両頭在外——輸出入の拡大に将来の経済発展をはかる、という主張も見られる(陳灼華論文、上掲誌所収)。

改革解放下の中国経済発展の方向はどのようなのか? これらの現象に対して、「田園の産業と外国貿易の末裔としての都市の産業」(スミス)、「生産者の商人化と商人の生産者支配」(マルクス)、「農村の織元と都市の織元、織元の対抗的な二つの類型」(大塚久雄)などの史観を軽々に適用するのは、「葦の髄から天井を覗」いたに過ぎない滞在5か月の私として、浅慮の毀りは免れまい。

(1994年1月執筆)

〔1992年9月~1993年1月 深圳大学滞在〕

楽しかった山登りの話

—お別れの言葉—

モンタナ州立大学名誉教授

ジェラルド・サリバン

ダーリーン・サリバン

むかしむかし、ある国に、年老いた夫婦が住んでいました。その国の空は果てしなく広く、雪を頂く山々は銀色に輝いていました。彼等夫婦は、そこで平穏無事に暮らし、三人の娘と一人の息子を育て上げたのでした。(人はこの美しい国を亜米利加と呼んでいません。)

この夫婦には、登山という共通の趣味がありました。暇さえあれば山に登りました。彼らが登った山は、高い山もあれば、低い山もありました。緑に覆われた山もあれば、氷と雪に凍付いた山もありました。事実、二人は

国中の殆ど全ての山の頂上を極めていたのです。

年をとってからも、山の頂上から眼下に広がる谷間を眺める楽しさは、若い頃と変わりませんでした。しかし、こうして山登りばかりしている自分達の将来について、一抹の不安が心をよぎることもあったのです。第一、雪山の頂上に着くまでには、若かった昔より時間がかかるようになっていました。そして山を下りてからは、昔よりも長い休息が必要でした。

ある日、老いた夫が妻に言いました。「このあたりで山登りをやめ、息子や娘達のところを訪ね歩いて、孫達を相手に老後を過ごすことにしたらどうだろう。山登りの話を本にまとめるのも悪くないと思うよ。」

老いた妻は、それはよい考えだと言って、夫の提案に賛成しました。彼女も孫と一緒にいる時間、犬と遊ぶ時間、庭で花を育てる時間が欲しかったのです。こうして、二人は山登りをやめて、もっとゆったりした生活に切り換えることを決めたのでした。

しかし、山登りをやめようと決めてから日も浅いある日、夫は外から家に戻ると妻に言いました。「太陽と花が一杯の麗しき国（日の本）に行つて、もう一度だけ、その国の雄大な山（熊本学園山）に登ってみたいと思わないかい。」

老いた妻には、果たしてそれがよい考えなのか、どうなのか判断できませんでした。彼女は夫に言いました。「私にも、心の中で、もう一度山に登ることを促す声が聞こえてきます。でも私達は、山に登るには年をとりすぎました。海の彼方にある、その美しい山に登

るチャンスは、私達より若い人に譲ったらどうでしょうか。若い人にはかないませんからね。」夫は言いました。「若い人が登ってもあまり疲れないことは認めるよ。しかし、私達は、山登りの技術という点では、若い人に負けていないと思うんだ。何しろ私達はいろいろな山に登ったのだから、若い人よりはるかに経験を積んでいるのだよ。だから、決まったコースを一步一步、着実に歩けば必ず頂上に着ける筈なんだ。」

結局、妻は、心に迷いを残したまま、夫と一緒に、息子や、娘や、孫や、犬達と別れて、遠い日の本へと旅立つことに同意したのでした。

彼等が日の本に到着すると、長い間会っていなかった友人達が出迎えてくれました。この人達の心のこもった挨拶を聞いていると、老夫婦はうれしくなり、言葉が違う異国にいても、自分達が暖かく受け入れてもらっていることを感じ取っていました。友人の中には、老夫婦をこの美しい国の観光に連れて行ったり、家庭に招待して、おいしい料理を御馳走してくれる人もいました。

やがて、老夫婦は、この「熊本学園山」が二人の天皇（岩野帝と園田帝）、それに「熊本学園幕府」の長（北古賀將軍）によって統治されていることを知りました。老夫婦は、この三人の統治者が高圧的でこわい人達かも知れないと思っていましたが、そうした心配を吹き飛ばすように、三人の統治者は夫婦にやさしい言葉をかけて下さるのでした。岩野帝などは、「熊本学園山」の山道で老夫婦に会うと、きまって暖かい握手と心からの笑顔で接して下さったものです。

老夫婦が道に迷うと、ガイドの誰かが助けに来てくれました。そして、正しい登山道に案内してくれました。もし、古田先生、星子さん、西村さん、マスデン先生、堀先生のような勝れたガイドがいてくれなかったら、老夫婦は頂上までの道を探しあぐね、あてどもなく彷徨い続けたことでしょう。

特に二人のガイドは老夫婦の力になってくれる大切な存在でした。それは美しく、やさしい二人の女性、喜佐田知子さんと浅生紀子さんです。この人達は、急な山道にさしかかると、きっと老夫婦を励まし、助けてくれるのでした。

仲間の登山家達も、老夫婦への助言、歓待を惜しみませんでした。老夫婦は、このベテランの登山家達を尊敬していました。この人達は、暗い山道を辿る老夫婦を導く道しるべ、天空に輝く星だったのでした。

少なくとも週に一回、日暮れ時になると、登山を学ぼうとする、若い人達のグループが集い合い、老夫婦を囲んで、山登りに必要な知識と行動について語りあったものです。この登山初心者達は、たちまち老夫婦の友人となり、二人の心の中に、ほのぼのとした温もりを残してくれました。

ついに老夫婦は、山の頂上に着きました。思った通り、二人は本当に疲れました。しかし、眼下の谷や森や湖、そして海にまでひろがる眺望は、今までの苦労を忘れさせる程美しいものだったのでした。

下りの道は、特に早いもので、老夫婦には、山を登る途中で、彼等を助けてくれた沢山の人達にきちんとお礼を言う暇もない位でした。

いつの間にか、老夫婦は、あの空が果てし

なくひろがり、山々が銀色に輝いている国、亜米利加に向けて飛び立つばかりの飛行機の中にいました。飛行機が離陸し、窓から、太陽と花が一杯の麗しき国、日の本が、黄昏の中に薄れて行くのを眺めているうちに、老夫婦は窓の外に向かって投げキッスをしていました。そして、風がそのキッスを運んで行って、二人にとっても親切だった人達のところまで届けてくれるようにと願っていたのでした。

暫くしてから、老人は妻に言いました。「実に素晴らしい登山だった。いつかまた登りたくなったよ。」

老いた妻は微笑んで、毛の薄くなった夫の頭を撫でながら言いました。「ええ、それも悪くないでしょう。でも、ここ暫くは家に落ち着きましょうよ。そして、「熊本学園山」の山道で出会った、すてきな人達の思い出を大切に、楽しい時を過ごすことにしましょう。」

「さようなら。」老人は、日の本の方に恭しく最敬礼をしながら言いました。

「さようなら。」老いた妻も頭を下げながら言いました。そして、心の中で考えていました。「つらいけど、さようならば、また会う日までのお別れです。」

(1993年7月執筆、日本語訳：足立昭七郎委員)

[1993年1月～7月 本学滞在]

モンタナ州立大学交換教授報告記

熊本短期大学助教授 原 口 行 雄

1992年8月19日夕刻、モンタナ州立大学のあるボーズマン郊外の空港に降り立ってから、翌年8月17日午後、同空港から飛び立つまでの月日は長いようで、短い1年間であった。

先ず、私達夫婦が子育てを通じて、垣間見た医療関係のことを簡単に述べてみたいと思う。93年の冬、娘の6ヶ月検診の為、シュロツハウアー先生の奥様の、ケリーさんのお世話で、デコネス・ホスピタルへ初めて出かけて行った。この病院には、5人の小児科医に専属の看護婦が一人ずつおり、医者も看護婦も白衣は着用しておらず、私服であった。それは幼児に不必要な恐怖感を抱かせない為の配慮からであった。看護婦はかなりの権限を与えられている。ある土曜日、娘が初めて風邪を引いた際、日直の看護婦が、知識と経験から自分の判断だけで、電話で適切な処置の仕方を教えてくれ、すぐに回復へ向かった。医者もおもちゃであやしながら、笑顔で、子供を診て、最後に『何か質問はないか』と質問の時間を取ってくれる。診察は丁寧で十分時間をかける。診察室の壁紙には、ディズニー・キャラクターや可愛いらしい動物の絵が描かれていた。熊本で、娘を小児科に連れていった際、医者の子供への接し方、看護婦の態度に落差を感じた。

在米中に、生後数ヶ月の子供を連れて、あちこち旅行して廻った。日本では、白眼視される行動だろうが、向こうでは大抵の家族がやっており、生後数週間の子供を連れて一家を見かけるのも決して珍しいことではない。子供を連れていて、アメリカ人だけではなく、色々な国の人が話しかけて来る。双方が子供連れの場合だと、『いくつですか』とか『お互い大変ですね』といった言葉を交わすことが多い。レストランに入っても、必ずといっていいくらい子供用の椅子が用意されており、店の人も客もよその子供に笑いか

けてくれる。従って、親子共々心置き無く、どこにでも出かけられる。子連れのアメリカ滞在は、一人旅では出会えない側面を持っており、貴重な体験であった。

〔1992年8月～1993年7月モンタナ州立大学滞在〕



イエローストーンにて

熊本学園での半年

深圳大学助教授 姚 凱

1993年3月末から1993年9月まで交換教員として熊本学園に半年間滞在した経歴は、私にとって生涯忘れられない新しい経験である。

最初の感じは生活のほうに関してのことであり、日本にとっても便利な生活の条件と優れるサービスが私に強い印象を残して、熊本学園国際交流センターからの親切に行き届いて接待することが私に深く感動を受けさせて私の不安がたちまち消えていき、すぐ新しい環境になれた。

つぎは日本各地でいろいろな国際交流活動に参加することを通じて、国際化というスローガンがもう深く人の心にしみ込んで、都市と農村も政府と民間も情熱に積極的にできるだけはやく国際化時代に突き進むために貢献をすることを深く感じた。熊本学園でも、

国際交流活動を盛んに推し進めている。

さらに熊本学園で授業と勉強をしたことも感銘ひとしおであり、学生が多彩な行事、先生が盛んな学術活動、職員が努力の働き、学校が効率的な管理などに、私は非常に感心して敬慕した。学園の中に新しい、きれいなビルが建ち並ぶ様子から学園の運営はかなり成功することを見て知ることができる。

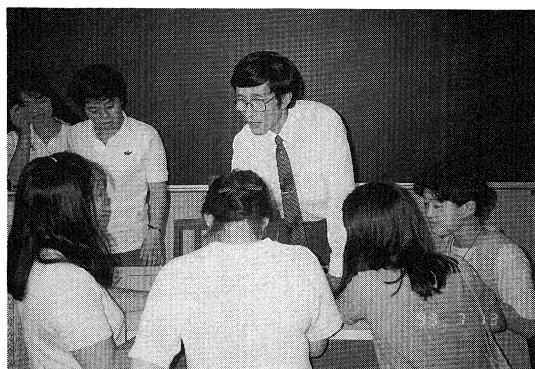
私は、商学部の二年生と四年生のゼミを参加したことがあって、とてもよい教育施設、活発な授業の方式、自由な学術雰囲気、先生の豊富な専門知識と開設の博引傍証などから学校の提供するすばらしい教育条件がはっきり現われる。どう問題点を検討する角度を確認するか、どう自分の見解を表現するか学生は自分の選ぶゼミからよい訓練を受けることができる。私の母国に条件の制限によって、大学の本科在生学生によって、ゼミという教育方式を採用することはすくない。このことから私に日本の大学生が本当に幸せの感慨をもたらしてくれる。深圳大学の交換教員の仕事は日本の学生たちに中国語を教えることである。熊本学園でこんなに多くの学生が中国語を選択して学ぶことを見て、私はとても喜ぶ

が日本語がまだまだで、また語学の専門家でない私に、これまたいへんな仕事であって、やっと職責を果たし得たのは全く熊本商大の中国語先生と国際交流センター事務室の特別な助けにたよるものにほかない。

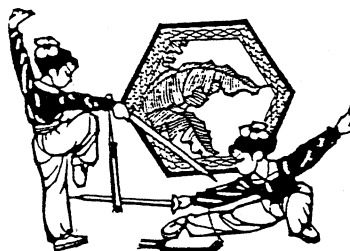
熊本学園で生活にも仕事にも暖かい人情が一杯で感じることができる。今に至るまで、そんなことを思いおこすと心にも感激の意に満ちている。きれいな熊本学園にきて交換教員とすることは喜ばしい機会に値することであって、私が非常にこの一つのめったにない経歴を懐かしんでいる。

(1993年9月執筆)

[1993年3月～9月 本学滞在]



教養科での授業風景



短期派遣留学生報告記

キャロル大学での思い出

国際経済学科3年 伊織美亜子

2月5日の深夜、やっとHelen空港に着いた。飛行機でも興奮のあまり、ほとんど睡眠なしに移動を続けていたが疲れを感じことはなかった。空港から一歩でると、あたりは見渡すかぎりの銀世界。肌を感じる冷気でモンタナに着いた実感が、体の芯までしみ渡ってきた。空港から大学までの車の移動中も、日本との家なみの差に驚いた。おとぎ話に出てくる様なパステルカラーの家が次々と現れる。小さな丘の上に、いくつかのレンガ色の建物が、まっ白な雪に飾られているのが見えた。Carroll大学である。とても暖かみのある建物で、リラックスした気持ちにさせられた。

授業は、インターナショナルの生徒のための特別なクラスが用意されていた。中国、韓国、ロシア、スペイン出身の人々と一緒に授業を受ける。各国の国民性というか、バラエティーに富んだ、おもしろい授業だ。同じアジア系でも中国の人々は驚くほど主張がはっきりしていたのが印象的だった。ディスカッション形式の授業に戸惑って、発言の少なかつた私は“日本人は無口で主張がない”と思われたのではないかと不安である。実際、私がアメリカで最も痛感させられたのは、自分の問題意識のなさである。Yes、/No、が言えても、なぜか、どうしてなのかという質問

になると、答えに困ってしまう。多数意見に流されることなく、自分の意見を持つことは困難だが重要なことだと再認識させられた。

またCarroll大学では年に1回インターナショナル・フェスティバルが行われる。国際的文化交流が身近で、とても良い機会だと思う。日本からは、肉ジャガとお好み焼きなど食べ物を出したが、なかなか好評であった。個人レベルでの国際交流は、より深く、親しみやすいだけに重要だと思う。1人でも多くの人が日本に興味を持ってくれればと思う。私は今回の訪米でアメリカだけでなく、様々な国の文化にふれることができ、欲ばりな短期留学を体験することができた。

(1993年9月執筆)

〔1993年2月～3月 キャロル大学派遣〕



3月に行われたインターナショナル・フェスティバルにて（筆者は前列右から3番目）

百聞は一見に如ず

商学科2年 上村 勝男

「百聞は一見に如ず」という言葉がある。

私は、今回の留学でこの言葉を改めて思い返した。

日本では、海外とくにアメリカに関する情報は沢山入ってくる。自分も留学する前のアメリカに対するイメージとはそれから得たものであった。

もともと私は留学に対して日々切望していた為、今回の留学は夢が叶ったわけだが、ここでは個々の経験は書かずに、留学を切望している人たちの留学する気持ちを保持し増大させるための心の処方箋程度になってくれれば良いと思っている。

留学するにあたって、私は多少の英語単語英語表現を確認し、それらをぶらさげてアメリカ・モンタナ州に上陸した。私は、それら一つ一つを鉄砲の玉と考えていたので、アメリカで生活するためには、多ければ多い程いいと考えていた。それで、私生活でその玉をどんどん放ちまくったつもりだったが、どうも相手に命中せず英語が上手く通じなかった。結局それらは、基本的な単語を使った表現で済むということが多かったのであった。それらの表現と毎日出会う度、目から鱗の落ちる思いであった。

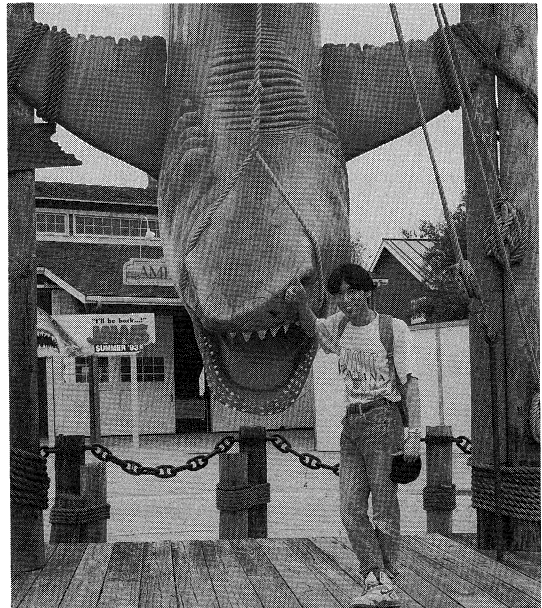
私の周りには、留学をしたいが、行った方がいいだろうか、という話をよく聞くが。私は是非そういう人には留学をしてもらいたい。啐啄の機という言葉があるように、今では、世間では国際時代で海外へ行く環境は完全に整っているし、そういう外的なものに対して内的な個人個人の気持ちが高まっているのならそれを活かすべきであろう。とにかく、自分で見た海外に対する感想を持って欲しい。「百聞は一見に如ず」である。

こんな偉そうなことを書いてしまったが、今はもう私も新たな留学を切望している一生徒である。だから、またこれを読み返して勇気づけることもあるかも知れない。

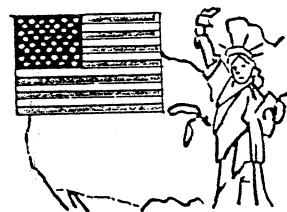
お世話になった方々へ、有難うございます。

(1993年9月執筆)

[1993年2月～3月モンタナ州立大学派遣]



フロリダのユニヴァーサルスタジオにて



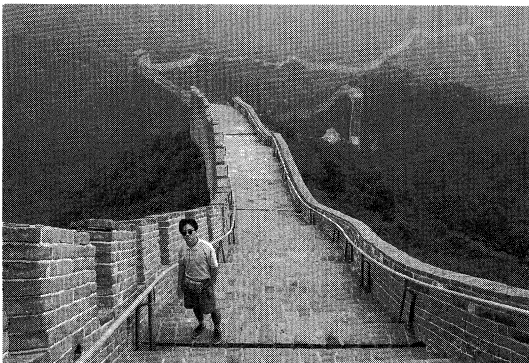
長期交換及び長期認定留学生報告記

「留学のすすめ」

経済学科4年 緒方浩一

私は、中国の深圳という所に1年間、交換留学生として留学しました。深圳という所は、香港に隣接していて、経済的にも文化的にもかなり発展していて、とても私の想像とは違っていました。市街地には、高層ビルが建ち並び、街を走っている車のほとんどが日本車で、コンビニエンスストアやファーストフードの店などもあり、街の雰囲気はほとんど日本と変わりないと言っても間違いではないと思います。

そして深圳大学は、まだ歴史はありませんが敷地は誰もが驚くほど広く、建物はとてもきれいで、先生方も学生達もとても親切で言葉の問題さえ除けば、他に問題はなかったような気がします。日本人留学生も私が留学していた当時は、十数名だったのが、今では30名以上もいるそうです。日本各地から大学生



慕田峪の万里の長城

や社会人、そして高校卒業後すぐに留学した人など、いろんな人達が集まっているので、留学したことによって、日本各地に沢山の友達をつくることができました。

夏休みには、中国のいろんな所へ旅行すると思います。中国は、日本と違ってその場所によって、全く違った雰囲気を持っているし、世界的にも有名な観光地や名所、そしてその土地でしか食べられない料理が沢山あります。そして何よりの利点が、交通費、宿泊費、食費がとにかく安いということです。中国に特別興味を持たない人でも、きっと満足する旅行になると思います。

でもこれだけいい面ばかり書いても、やはり言葉の問題は消えないと思います。でもそれはどれだけ勉強しても消えない不安ですから、語学の勉強のためだけに留学する必要はなく、気軽な気持ちで、大学生活の思い出の一つとして、とにかく飛び出すことが大切だと思います。言葉の不安は時間が解決してくれます。私が一年間楽しい留学生活を送れたことが、語学力が全くなくても、大丈夫だという何よりの証拠だと思います。

〔1991年2月～1992年2月 深圳大学派遣〕

マルチカルチュラル・コミュニケーション

国際経済学科4年 矢澤 恵子

8月23日にモンタナ州ボーズマン市で初雪が降った翌日から、アメリカでの学生生活が

始まった。前期はとりあえず基本的な授業をとったが、後期は少々クセのあるものを選んだ。選択した授業はどの方も大当たりだったが、特に「マルチカルチュラル・コミュニケーション」という、日系三世の先生のクラスは本当にすばらしかった。

そのヤブイ先生の講義は授業数の3分の1くらいで、ほとんどがゲストスピーカーと、グループによる外国についてのプレゼンテーションだった。

ゲストスピーカーには本当に多様な人々、例えば外国人、黒人やネイティブアメリカンなどのマイノリティ、ゲイ、国際結婚をした人など、世の中で差別を受けやすい人々が招かれていた。まさか、こんな田舎でこれ程多くの人々の話を聞けると思っていた私は、大きな刺激を受けた。

ゲストスピーカーの話の後の学生（白人がほとんど）の質問も興味深かった。黒人のスピーチの後、ある人が差別の事に触れて、「私なんかもバーでたまに黒人を見かけたら、やっぱり『この人こんなとこで何してるの』と思ってしまう。といったような事を本人の前で言っていたのにはびっくりした。それ程、モンタナは白人が多い州である。



10月のハロウィーンパーティ（筆者は右）

プレゼンテーションでは、日本をとりあげるグループに毎回ひっぱられて、一度浴衣を着てお茶を披露した事がある。留学前に3ヶ月ならった程度でかなりめっちゃくちゃだったが、すまして進めたら皆感心していた。

白人以外の人間がめずらしい土地で、優遇されたこともあれば、英語が上手くないからと、軽視されたこともある。多くの外国人はそういうくやしい思いを味わっていたようだ。留学して初めて「国際交流」の意識がなくなったように思う。国籍を意識せずに多くの友人ができた。留学で得たものを一生大事にしていきたい。

最後に、留学の機会を与えて下さった方々、私を応援して下さいました方々に、心からお礼申し上げます。（1993年9月執筆）

〔1992年8月～1993年5月 モンタナ州立大学派遣〕

己に勝つ

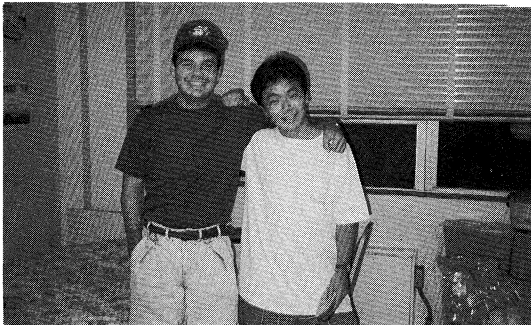
国際経済学科3年 清島 聖也

私は、テキサス州インカーネットワーク大学に1年間留学し、7日に帰国しました。この1年間で、留学することがどんなに大変か知りました。

1番大変なことは、自分の健康管理だと思っています。自分の体調を知ることが、朝起きてすぐやることでした。体調がすぐれない時、勉強しても全く頭の中に入ってきません。私の場合熟睡することができず、よく寝るにはどうすればよいか人に聞いていました。規則正しい生活に戻し、寝る前に静かな音楽を聞き、とにかく早くベッドに入るようにしたら、なんとか眠れるようになりました。

もうひとつ、留学してからの収穫と言えば、留学生の気持ちがものすごく理解できるようになったことです。私は留学する前から、商大に留学している留学生達と知り合いでしたが、皆が毎日どんな気持ちで暮らしているのかほとんど察することができませんでした。例えば彼らが本音を話してくれても、全く現実として伝わって来なかったのです。「理解したくても理解できない。なぜ？」答えは簡単でした。私が彼らと共有できる経験がなかったからです。私に留学経験がなかったから、みんなの気持ちをわかるはずがないと気づき、1年間行く決心をしました。日本とアメリカではお国事情は違いますが、アメリカで暮らしていて、商大の留学生も自分自身と戦いながら慣れない環境に順応していったのかと思った時、涙が出ました。みんな表情には出てこないけど、人には言えない苦勞をしています。

これから留学する人、留学したい人に一言。留学先では、目的意識を持つのが大切です。やりたいことを見つけたら、それを自分のモノにするために一生懸命がんばる。満足できたらいいけど、満足できなくても、それをステップにして再びチャレンジする。留学とは、七転八起の世界ではないでしょうか。だから、友達がたくさんできたら転んでも、それほど



寮にて（筆者は右）

痛く感じなくても済むのです。どこに行っても人は助けられて生きていることを忘れないでください。自分から助けることも忘れないでください。そういうふうにして人は成長していくのではないのでしょうか。留学を志す人皆さんがんばって下さい。私もがんばります。

（1993年9月執筆）

〔1992年8月～1993年8月〕

インカーネーション大学派遣〕

人との出会いに支えられた一年間

国際経済学科4年 前川 佳子

「アメリカに行って一番良かったことは何ですか？」帰国して初めてそう尋ねられたとき、私は無意識のうちに、「様々な人々と出会えたこと」と答えていた。そして、今振り返ってみても、それが一番適切な答だと思う。英語での授業に悲鳴をあげていた私を暖かく見守ってくれた友達や先生方、旅行中快く世話して下さいった父の友人や、一人旅で不安だった私に「いつでも連絡しなさい」と言ってくれた飛行機でたまたま乗り合わせた婦人とのふれ合い等々、ここではとても語り尽くせないが、その一つ一つが私を刺激し、支えてくれた。

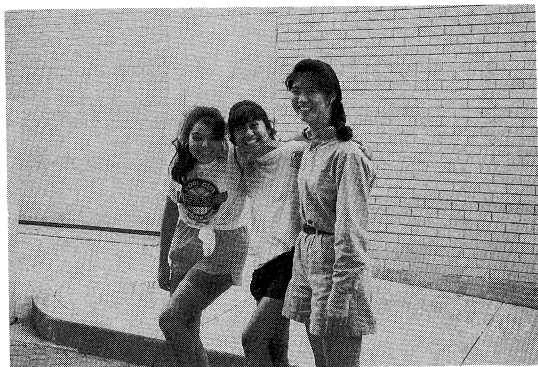
そして私の受けた親切、そのほとんど全てが決して恩きせがましくなく、その人々の心のボランティア精神からきていることが強く私の心を打った。

ボランティア、この精神がアメリカの中心にくるものだと感ぜずにはいられない。例えば、私がサンアントニオの大学で二学期目から所属していた、世界の文化をできるだけ多

くの人に知ってもらおうべく活動している Multicultural Ethnic Committeeでは、同じ目的で集まった人々各自が、自分の意志で、自分のやりたいことを、自分のできる範囲内で行っていた。

また、多くの人々と話す機会を得る度に、各人がそれぞれ自分の意見を持ち、熱っぽく語るのを耳にし、そのことからその精神は伺えた。そのような状況の中で、私自身、自分の意見を求められ、私にとっては自分を見つめ直す良いきっかけとなった。

アメリカでのそのような体験は、それまで狭い視野でしか物事を見れなかった私に、様々なものの見方を教えてくれた。そして、自分を見失おうとしていた私に、“自分をしっかり持って”と教えてくれた。“If you believe in your dreams, there's no limit to what you can do.”この言葉は、帰国直前偶然知り合った、サンフランシスコのフィッシャーマンズワープで毎週末歌っている人から言われた言葉である。私は、この言葉にどれだけ励まされたか計り知れない。これからも、今までにあった人との交流とこれから出会う人とのふれ合いを大切にしながら、自分を向上させる努力を続けていきたいと思う。



ダンスのクラスメイトと（筆者は右）

最後に、私に留学する機会を与えてくれた人々、私を支えてくれた多くの人々に感謝の気持ちを表したい。（1993年9月執筆）

〔1992年8月～1993年8月〕

アワーレディオブザレイク大学派遣〕

心と心の関係

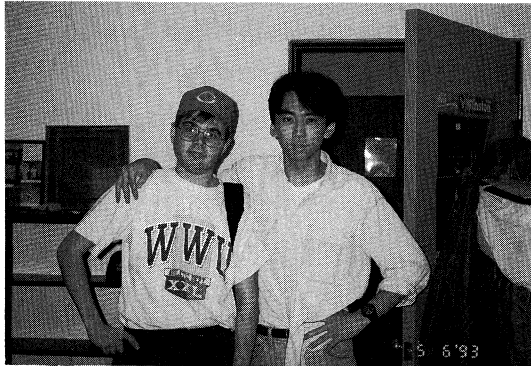
国際経済学科3年 石黒 武人

もう一年いたかったというのが、私の今の正直な気持ちです。それほど私がモンタナで過ごした一年間は充実していました。この留学で私はたくさんの貴重な経験をし、いろいろな大切なことを学んだと思います。人間的に一回り成長したのではないかと密かに思っているところです。

留学中の一つの目標であった英語の修得は、当初の予想より遥かに困難なものでした。一年間留学してペラペラ話せるようになるというのは私の甘い考えでした。もしそうならば、留学前に日本でよほどの英語力を身に付けているという前提が必要であると強く感じました。とはいうものの、努力のかけがあり、留学前とは格段に英語のコミュニケーション能力が向上したと思います。

しかし、英語力向上は私が留学から得た財産の1つにすぎません。私が留学して本当によかったと思う最大の理由はすばらしい友人たちに出会えたことです。その友人たちとはうわべだけの関係ではなく、心と心関係を築けたと思います。彼らとの友情は私の一生の宝物となることでしょう。

話は変わりますが、私が派遣されたキャロル大学には、いろいろな国から留学生が来て



寮の友人と（筆者は右）

います。私は中国、韓国、台湾の人たちとよく話をしましたが、自分のアジアへの認識不足を痛感すると同時に、アジア諸国への関心が高まりました。日本人はアメリカやヨーロッパには目がいきやすく、アジアや発展途上国を軽視するという傾向があると思います。その態度は日本がこれから国際社会を生き抜く上で改善されなければならない課題であると思います。

終わりに、この大変貴重な機会を与えてくださった方々に心から感謝し、熊本商科大の国際交流がよりよい発展を達成されることをお祈りします。

（1993年9月執筆）

〔1992年8月～1993年5月 キャロル大学派遣〕

熊本商科大学の皆様へ

モンタナ州立大学 ディビッド・R・グラント

日本での、素晴らしいけいけんをするきかいを私にあたえて下さって、本当にありがとうございました。

まず、私が日本にたいざいしていた間、私にとっても親切にしてくださいかんしゃしております。

去年の夏熊本についた時、私はとてもきた

いかんでいっぱいでした。さいしょ私は、日本とアメリカのちがいにとてもおどろきました。しかし、私はだんだんそのちがいになってきました。

げんごや食べもの、そしてぶんかは、私のふるさととはとてもちがっていたのです。私は親切な日本人の家族のかたがたと、とても楽しいひびをすごし、すばらしいもてなしをうけたことを、たいへんかんしゃしております。私があった日本人の人は、みんなわたしを家族の一いんのようにあつかってくれました。彼らは私に親しみをもって、そしてかんだいにせっしてくれました。私は、とてもおいしいわしょくをいただきました。そのおかげで、去年の正月までに、とても太ってしまいました。きょうどりょうりは、私の一番好きな食べものでした。その中でも、馬刺しとからしれんこんがとくに好きでした。ほかに、ラーメンやお寿しや焼鳥、たこ焼き、お好み焼きなどもよく食べていました。

また日本のれきしや美術、そしてけんちくようしきは、私の一番のおもいでとして、つよくのこっています。熊本城や、いろいろなじんじゃや寺は私にとってとてもみりょくてきでした。こういった美しいところにくらすことで、日本人のすばらしい心がうまれるのだと思います。日本人が、こういう面に誇りをもつことは、とてもいいことだと思います。

日本は小さい国で、たくさんの方がいますが、じつにふうこうめいびなところですが、こうだいなみどりの山々には、杉の木や竹、そしてシダのしげみや花が、かぞおおくありました。

私九州ぜんぶをまわって、いろいろな村には、田んぼやみかん畑がありました。私はそ



交換留学生送別会にて（筆者は右から3番目）

ういう村をたずねて、たくさんの人々にであい、ふれあうことができました。これらのおもいでは私にとってこの手紙にはかきあらわせないほど、きちょうなたいけんとしてのこっています。日本を訪れ、出あったともだちにかならずさいかいしたいと思います。

出威武

（1993年9月執筆）

〔1992年9月～1993年8月 本学滞在〕

日本留学で学んだ事

インカーネットワーク大学

ブルック・A・マゼラ

私の名前はブルック・A・マゼラです。私はサンアントニオ・熊本間の国際姉妹都市協定にもとづく、交換留学生として、1992年から1993年にかけて熊本に滞在していました。私は商大に通い、日本語の集中講座、国際関係、日本経済の各教科を受講しました。またゼミでは、日本企業のさまざまな側面について学びました。

サンアントニオから遠く離れた熊本に着いた時は、何が待ち受けているのか見当も付かず、とても不安でした。しかし、熊本に着い

て、用意された宿舎に落ち着いてみると、沢山の人達から親切にして頂き、そうした不安も全くの杞憂に過ぎませんでした。事実、私には多くのすばらしい人達との出会いがありました。それは大学や熊本市役所関係の人達だけでなく、熊本県内外の方々も含まれていて、その人達とは今でも変わらぬ友情で結ばれています。

留学中は、一日一日が新しい経験でしたが、経験を積むことで私は精神的に成長し、国際交流、つまり世界中の人達が心を一つにして付き合う事の大切さが分かって来たのです。世界に向かって私の目が、そして私の心が開かれたのです。

今、私は、このように私を育ててくれた留学制度が、どれ位大切なものであるかを実感しています。外国に出かけて行き、その国の人々について、じかに学び、そしてその人達を心から尊敬できるようになること——これこそ本当の国際交流なのです。

最後に私は、私の日本滞在をかくもすばらしいものにして下さった皆様に感謝の意を表します。腕を一杯に開けて私を抱擁し、自分でも気付かなかった能力に目醒めさせて下さったお国の人達のことは、決して忘れないでしょう。本当にありがとうございました。

（1993年9月執筆、日本語訳：足立昭七郎委員）

〔1992年9月～1993年8月 本学滞在〕



長崎旅行記念

本学留学生への交流の主な案内（1993年度）

名 称	主 催	内 容	期 日	備 考
留学生の会	熊本YWCA	日本の家庭紹介 各種行事への案内	年間を通じ随時 入会申込受付	
熊本・大分県内留学生交 流会	国際ロータリー第2720地 区ローターアクト	小国ドームでの交流 会	6/20	13名参加
北海道・国際交流のつど い	北海道国際交流センター	夏期休業中のホーム スティ	8/17～9/1	3名参加
水俣国際親善競り舟大会	水俣市	大会出場・ホームス ティ	7/24～26	7名参加
火の国まつり・施設見学	熊本市		9/19	多数参加
奥阿蘇交流会	阿蘇青年会議所	奥阿蘇の大自然のな かでの交流会	9/5	10名参加
ワールドコミュニケーション	熊本東郵便局	高校生との交流会	10/17	12名参加
『火の国メガミックス』 出演	NHK熊本放送	『熊本へ来たれ留學 生』	10/27収録	23名参加
熊本在住の留学生との懇 談会	日本貿易振興協会等	県内企業経営家との 懇談会	11/19	20名参加
『坂本龍馬』	新制作座文化センター	観劇への招待	12/5	対象者19名
国際教育理解等の活動	飽田東小・西原小	児童との交流	年間	アメリカ・イギ リス・中国
春節祝賀会	熊本県日中交流協会	懇談と夕食会	2/15	30名参加
激励懇談会	熊本南ロータリークラブ	懇談と夕食会	2/18	
留学生交流会	熊本東南ロータリークラ ブ	創立10周年記念行事 の一環	2/26	46名参加

1993年度地域別外国人留学生数

(12月1日現在)

国籍 (地域)	学部・学科留学生							研究留学生			大学院生	交換留学生	合計
	商大				短大		合計	商	短	合計			
	1	2	3	4	1	2							
中国	1	9	11	5		1	27名	13	22	35名	10名	2名	74名
台湾	1	2	6	2			11名				3名		14名
韓国		2		3		4	9名	3	1	4名			13名
米国												3名	3名
英国												1名	1名
イタリア												1名	1名
メキシコ												1名	1名
オーストラリア		1					1名						1名
インド								1		1名			1名
ブラジル									1	1名			1名
合計	2	14	17	10	0	5	48名	17	24	41名	13名	8名	110名

1993年度外国人留学生名簿

1. 学部留学生・学科留学生

(11月10日現在)

No.	氏名	国籍	学歴
1	邱 鴻 淳 男	台湾	経営学科1年
2	楊 軍 女	中国	経営学科1年
3	林 木 鳳 女	中国	商学科2年
4	権 奇 雲 男	韓国	経営学科2年
5	廖 柏 明 男	中国	経営学科2年
6	楊 思 睿 男	中国	経営学科2年
7	梁 湖 南 女	韓国	経営学科2年
8	王 建 平 男	中国	経済学科2年
9	廖 誌 武 男	台湾	経済学科2年
10	沈 黙 男	中国	経済学科2年
11	SUSAN ALLEN 女	オーストラリア	国際経済学科2年
12	陳 瑞 君 女	台湾	国際経済学科2年
13	林 瀚 男	中国	国際経済学科2年
14	陸 兵 男	中国	国際経済学科2年
15	何 成 雨 男	中国	国際経済学科2年
16	刘 毅 男	中国	国際経済学科2年
17	柳 貞 姫 女	韓国	社会科2年
18	徐 到 希 女	韓国	保育科2年
19	孫 愛 紅 女	中国	教養科2年
20	韓 景 光 男	中国	商学科3年
21	慕 強 男	中国	商学科3年
22	李 勤 男	中国	商学科3年
23	劉 梅 女	中国	商学科3年

24	呂 躍 進	男	中国	商学科 3年
25	姚 燦	男	中国	商学科 3年
26	楊 兆 利	男	中国	経営学科 3年
27	吳 志 仁	男	台湾	経営学科 3年
28	李 剛 剛	男	中国	経営学科 3年
29	陳 惠 敏	女	台湾	経営学科 3年
30	曲 家 岩	男	中国	経済学科 3年
31	陳 宏 孟	男	台湾	経済学科 3年
32	李 尚 家	男	台湾	経済学科 3年
33	李 芳 琪	女	台湾	国際経済学科 3年
34	袁 秀 雲	女	中国	国際経済学科 3年
35	陳 秋 娟	女	台湾	国際経済学科 3年
36	李 谷 偉	男	中国	国際経済学科 3年
37	楊 津 京	男	中国	商学科 4年
38	喬 軍 鋒	男	中国	商学科 4年
39	白 学 澤	男	中国	商学科 4年
40	韓 相 倫	男	韓国	経営学科 4年
41	崔 相 哲	男	韓国	経営学科 4年
42	林 遠 玲	女	台湾	経営学科 4年
43	金 仁 萬	男	韓国	経営学科 4年
44	周 淵 龍	男	台湾	経営学科 4年
45	李 德 華	男	中国	経営学科 4年
46	朱 毓 雷	男	中国	経済学科 4年
47	全 相 順	女	韓国	保育科 2年
48	李 東 蘭	女	韓国	教養科 2年

2. 学部研究留学生 (商大)

1	郝 小 東	男	中国	商学科
2	薛 毅	男	中国	商学科
3	楊 弢	女	中国	商学科
4	張 明	女	中国	商学科

5	蔡 強 善	男	中国	商学科
6	王 文	男	中国	商学科
7	馬 曉 軍	男	中国	商学科
8	黄 仁 甲	男	韓国	商学科
9	吳 榮 錫	男	韓国	商学科
10	MISHIRA MANISH KUMAR	男	インド	経営学科
11	郭 鉄 洪	男	中国	経営学科
12	朴 善 淑	女	韓国	経営学科
13	宋 修 广	男	中国	経営学科
14	許 翔	女	中国	経営学科
15	李 谷 野	男	中国	経営学科
16	吳 長 征	男	中国	国際経済学科
17	盛 永 儉	男	中国	国際経済学科

3. 学科研究留学生 (短大)

1	黄 洛 山	男	中国	社会科
2	孫 桂 榮	女	中国	社会科
3	陳 勇	男	中国	社会科
4	馬 秋 紅	女	中国	社会科
5	魏 世 維	男	中国	社会科
6	蘇 克 勤	男	中国	社会科
7	邵 会 师	女	中国	社会科
8	韓 林	男	中国	社会科
9	武 平	男	中国	社会科
10	金 廷 恩	女	韓国	社会科
11	崔 岩	女	中国	社会科
12	楊 玉 琴	女	中国	社会科
13	GINA YZUMI MITSUNAGA	女	ブラジル	保育科
14	于 秋 明	女	中国	保育科
15	李 志 芳	女	中国	保育科
16	劉 萍	女	中国	保育科

17	何兆斌	男	中国	教養科
18	孫愛東	男	中国	教養科
19	周燕	女	中国	教養科
20	于晶	女	中国	教養科
21	馮立	男	中国	教養科
22	袁勇	男	中国	教養科
23	劉凱玲	女	中国	教養科
24	彭海奇	女	中国	教養科

4. 大学院生

1	羅智偉	男	中国	商学・修士課程1年
2	徐麗君	女	中国	商学・修士課程1年
3	楊奇原	男	台湾	商学・修士課程1年
4	応鳴一	女	中国	商学・修士課程1年
5	湯小寧	男	中国	経営・修士課程1年
6	劉雲龍	男	中国	経営・修士課程1年
7	鐘曉清	女	中国	経営・修士課程1年
8	苗鉄鋒	男	中国	経営・修士課程1年
9	王永芳	男	台湾	商学・修士課程2年
10	蘇愛民	男	中国	商学・修士課程2年
11	陳金泉	男	台湾	商学・修士課程2年
12	廖東鳴	男	中国	商学・修士課程2年
13	張英	女	中国	商学・修士課程2年

5. 交換留学生

1	Roberto Ferrari	男	イタリア	経営学科3年
2	Clive White	男	イギリス	経営学科3年
3	Patrick Keane	男	アメリカ	国際経済学科3年
4	Christi Baker	女	アメリカ	国際経済学科4年
5	尤梅	女	中国	経営学科4年
6	吳嵘	女	中国	経営学科4年

6. サンアントニオ市派遣留学生

1	Melissa Alvarado	女	アメリカ	国際経済学科
2	Nelly Sanchez	女	メキシコ	国際経済学科



海外留学者一覽 (過去3年間)

年	長期留学	短期留学	出張・視察
1991年	坂口 潮 イギリス	朴 宗根 ソウル	前田 一郎 渡辺 皓 アメリカ 西ヨーロッパ
1992年		西園寺明治 イギリス	小島 恒久 野見山俊一 井上 勝子 ヨーロッパ ヨーロッパ ヨーロッパ
1993年		向井久美子 アメリカ	岡村 一 山内 良一 金 鍾碩 ヨーロッパ オーストリア ドイツ

海外ゼミ研修一覽

年	引率教員名	研 修 先	期 間	参加学生
1992年	宮崎 俊策	韓国	2/22~2/24	24名
	田島 司郎	深圳大学	3/4~3/7	6名
	中野 裕治	深圳大学	3/4~3/7	5名
	西 紀昭	深圳・桂林・柳州	3/9~3/15	12名
	米岡ジュリ	韓国	3/15~3/19	11名
	用稲 孝道	釜山・慶州	3/28~3/31	19名
	田中 利彦	韓国・釜山・慶州・蔚山	11/24~11/26	15名
	李 公 綽	北京	12/26~12/30	12名
	西 紀昭	北京・ハルビン	12/27~1/1	12名
	1993年	菅 知彦	ロンドン・パリ	2/6~2/13
古田 龍助		パリ	2/3~2/7	12名
花谷 薫		フランス	2/7~2/2	25名
田島 司郎		深圳大学	2/15~2/18	11名
宮崎 俊策		ソウル他	2/20~2/22	35名
中野 裕治		ソウル・大田大学校	8/23~8/26	} 50名
田島 司郎		ソウル・大田大学校	8/23~8/26	
大間知啓輔		北京	10/4~10/11	11名
勝部 伸夫		ソウル・大田大学校	11/13~11/16	29名
田中 利彦		ソウル・水源・大田	11/24~11/26	17名
杉田 憲道		ロンドン・ベルリン	12/18~12/25	13名
李 公 綽		北京・西安・上海	12/25~12/30	12名
安田 義郎		イギリス・フランス	12/14~12/20	27名
永井 博		ニュージーランド	12/20~12/29	9名
古田 龍助		イタリア・ローマ	12/6~12/11	26名

1993年度 外国人留学生の奨学金受給状況

- (1) 私費外国人留学生学習奨励費（日本国際教育協会）
- | | | |
|-------|---------------|-------|
| ・月 額 | 大学院生……68,000円 | |
| | 学部学科……47,000円 | |
| ・受給者数 | 大学院生……6名 | |
| | 学部生……15名 | |
| | 学科生……1名 | 計 22名 |
- (2) 熊本県外国人留学生奨学金
- | | | |
|-------|----------|-------|
| ・月 額 | 30,000円 | |
| ・受給者数 | 大学院生……2名 | |
| | 学部生……9名 | |
| | 学科研究生…1名 | 計 12名 |
- (3) ロータリー寿崎奨学金
- | | | |
|-------|----------|-------|
| ・月 額 | 30,000円 | |
| ・受給者数 | 大学院生……1名 | |
| | 学部生……9名 | |
| | 学科生……1名 | 計 11名 |
- (4) 在熊外国人留学生ライオンズクラブ奨学金
- | | | |
|-------|----------|------|
| ・月 額 | 15,000円 | |
| ・受給者数 | 大学院生……1名 | |
| | 学部生……5名 | 計 6名 |
- (5) ロータリー米山記念奨学金
- | | | |
|-------|----------------|------|
| ・月 額 | 大学院生……150,000円 | |
| | 学部学科……120,000円 | |
| ・受給者数 | 大学院生……2名 | |
| | 学部生……4名 | 計 6名 |
- (6) 肥後銀行国際交流奨学金
- | | | |
|-------|---------|------|
| ・月 額 | 30,000円 | |
| ・受給者数 | 学部生……2名 | 計 2名 |

(7) 助平和中島財団外国人留学生奨学金

・月 額 大学院生……120,000円
 学部学科……100,000円

・受給者数 大学院生…… 1名 計 1名

(8) 助寿屋育英財団奨学金

・月 額 10,000円

・受給者数 大学院生…… 2名
 学 部 生…… 2名
 学科研究生… 1名

計 5名

	在籍者数	受給者数	非受給者数
学 部 留 学 生	43	40 (46件)	3
学 科 留 学 生	5	1 (2件)	4
学部研究留学生	17	0 (0件)	17
学科研究留学生	24	2 (2件)	22
大 学 院 生	13	11 (15件)	2
合 計	102	54 (65件)	48

(注) 非受給者の中には、奨学金応募をしなかった者もいる。

1993年 国 際

月	米 国 ・ モ ン タ ナ	韓 国 ・ 大 田
1月	11日 ロバートH. フィギンズ先生（交換教員）離熊 23日 ジェラルド・サリバン先生（交換教員）来熊	15日 北原明彦先生（交換教員）帰国
2月	5日 春期短期派遣留学生（5名）出発	10日 第6回大田大学校学生研修団来熊 13日 第6回大田大学校学生研修団離熊 27日 宣吉均先生（交換教員）帰国
3月	17日 MSUマイケル・マローン学長ご夫妻来熊 19日 MSUマイケル・マローン学長ご夫妻離熊 24日 バーバラ・シルベスターさん（MSU交換留学生）来熊 30日 バーバラ・シルベスターさん（MSU交換留学生）離熊 30日 春期短期派遣留学生（5名）帰国	13日 尹光鳳先生（交換教員）来熊
4月	27日 UM創立100周年記念行事訪問団出発	
5月	5日 UM創立100周年記念行事訪問団帰国 18日 第4回モンタナ研修団来熊 23日 西澤和晃さん（交換留学生）帰国 24日 矢澤恵子さん（交換留学生）帰国	8日 大田大学校企劃室長・弘報国際課長来学
6月	16日 第4回モンタナ研修団離熊 17日 成松明子さん（交換留学生）帰国	8日 大田大学校経営行政大学院研修団来学
7月	10日 コーリー・ロミンジャーくん（交換留学生）帰国 16日 ディビッド・グランドくん（交換留学生）帰国 16日 石黒武人くん（交換留学生）帰国 17日 ジェラルド・サリバン先生（交換教員）帰国 19日 野田光くん、佐々木栄治くん（交換留学生）出発	5日 大田大学校職員研修団来学 15日 大田大学校職員研修団離熊
8月	2日 村上大介くん、菅原由奈子さん（長期交換留学生）出発 18日 内山明美さん（交換留学生）出発 25日 原口行雄先生（交換教員）帰国	23日 大田大学校表敬訪問・熊本デー参加

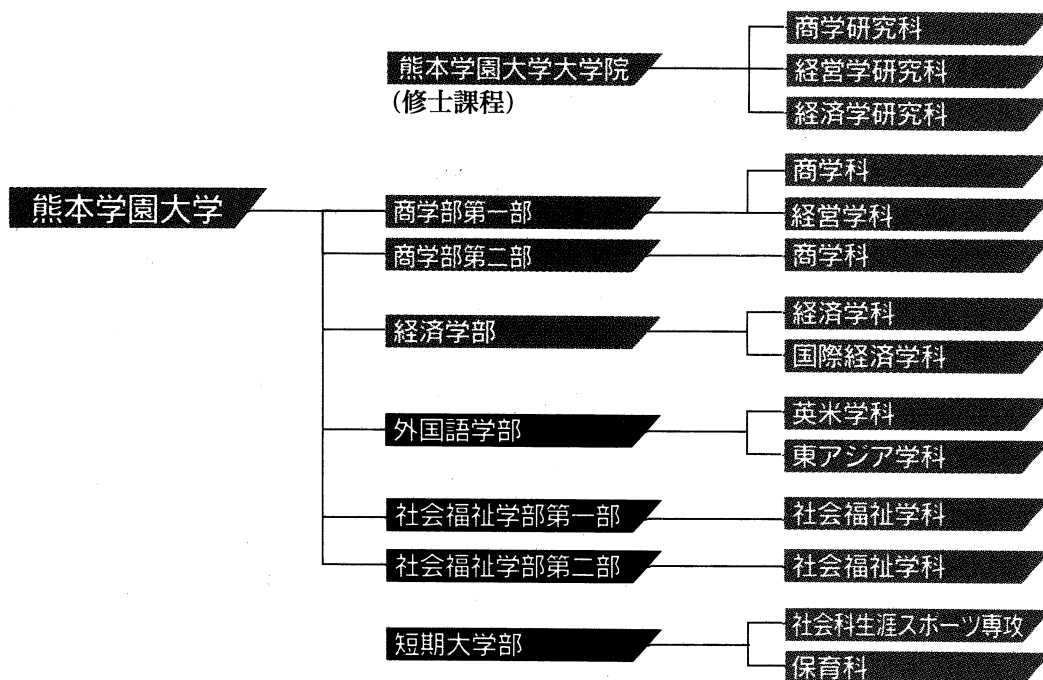
交 流 E V E N T S

中 国 ・ 深 圳	欧 州 ・ そ の 他
10日 鳶 啓先生 (交換教員) 帰国 17日 緒方浩一くん、倉重圭介くん (交換留学生) 帰国 23日 舌間正規くん、山本さゆりさん (交換留学生) 出発	22日 リバプールジョンモーズ大学との交流協定書調印式
3日 応鳴一さん (交換留学生) 帰国 18日 范漫真さん (交換留学生) 帰国 31日 姚 凱先生 (交換教員) 来熊	1日 セヴリーヌ・ロワイエさん (リヨン商科大学交換留学生) 離熊
	16日 広西壮族自治区教育考察団来学 21日 甲南イリノイ学生研修団来熊 24日 甲南イリノイ学生研修団離熊
	12日 リバプールジョンモーズ大学ジョン・コリンズ先生来学 24日 独ライオンラント・プファルツ州立専門大学ペーター・ヴェッツラー教授来学
28日 尤梅さん、吳嶸さん (交換留学生) 来熊	
	3日 韓国大学生訪日研修団来熊 5日 韓国大学生訪日研修団離熊 8日 清島聖也くん (熊本市派遣留学生) 帰国 12日 林正人くん (リバプールジョンモーズ大学長期交換留学生) 出発 15日 国際経済学科「外国事情研修」米国班出発 17日 ダニエル・ボズナンスキーくん (交換留学生) 帰国 18日 国際経済学科「外国事情研修」韓国班出発 21日 ティム・クラークくん (交換留学生) 帰国 22日 ブルック・マゼラさん (サンアントニオ市派遣留学生) 帰国 24日 前川佳子さん (熊本市派遣留学生) 帰国 27日 国際経済学科「外国事情研修」中国班出発 30日 駐日英国臨時代理大使エドリアン・ソープ氏来学 30日 穴井隆二くん (リヨン商科大学長期交換留学生) 出発
	12日 リヨン商科大学 米山悦夫教授来学 13日 国際経済学科「外国事情研修」米国班帰国 16日 国際経済学科「外国事情研修」韓国班帰国 17日 山本亮子さん、斉藤由香さん (熊本市派遣留学生) 出発 20日 ピーター・マズーカⅢくん (サンアントニオ市派遣留学生) 帰国 27日 国際経済学科「外国事情研修」中国班帰国

月	米 国 ・ モ ン タ ナ	韓 国 ・ 大 田
9月	7日 クリスティ・ベーカーさん、パトリック・キーンくん（キャロル大学交換留学生）来学 13日 ロバート・スミス先生（MSU交換教員）来熊 14日 中村洋子さん（交換留学生）帰国 25日 シャーリー・ベーカー女史（キャロル大学）来熊	1日 大田大学校訪問学生研修団出発 7日 大田大学校訪問学生研修団帰国
10月		28日 大田大学校開校13周年記念式典参加
11月	16日 MSUスティーブ・ブラウンご夫婦来学	
12月	22日 カーク・マスデン先生（交換教員）出発	

1994年4月、文科系総合大学へ

■ 学園の構成





中 国 ・ 深 圳	欧 州 ・ そ の 他
15日 郭来舜先生（交換教員）来熊 25日 深圳大学創立10周年記念行事訪問団出発 28日 深圳大学創立10周年記念行事訪問団帰国 30日 姚 凱先生（交換教員）帰国	8日 ロベルト・フェラーリくん、クライヴ・ホワイトくん （リバプールジョンモーズ大学長期交換留学生）来熊 メリッサ・アルバラードさん、ネリー・サンチェ スさん（サンアントニオ市派遣留学生）来熊 16日 鎌守順子さん（リバプールジョンモーズ大学長期 交換留学生）出発
	1日 広西壮族自治区副主席・桂林市長 袁鳳蘭女士来学 2日 サンアントニオ市議員リンダ・ピラ・バーク女士来学
11日 蔡德麟深圳大学学長一行5名来学 13日 蔡德麟深圳大学学長一行5名離熊	11日 サンアントニオ市アワーレディオブザレイク大学 ネイジー教授来学

SEMINARS

国際交流センター事務局主催：交換教授による教職員向け語学教室

1. 韓国語会話クラス

講 師 尹 光 鳳 先生（韓国・大田大学校）
 開催日 1993年4月15日から1994年1月27日まで原則として毎週水曜日
 時 間 17：00～18：00

2. 英語会話クラス

講 師 ロバート・スミス先生（米国・モンタナ州立大学）
 開催日 1993年10月4日から1994年2月28日まで原則として毎週月曜日
 時 間 17：30～18：30

3. 中国語会話クラス

講 師 姚 凱 先生・郭 来 舜 先生（中国・深圳大学）
 開催日 1993年4月16日から1994年12月16日まで原則として毎週木曜日
 時 間 17：00～18：00

※ 他にも研究所や学部等が主催する講演会が多数あり、記載は省略する。

国際交流センター事務局のスタッフ紹介（1993年12月現在）


室 長 星子 三郎
 室長補佐 西村 禮二
 喜佐田知子（育休） 切通しのぶ 浅生 紀子 川邊 裕佳
 古堅 律子 園田 菜里

平成6年4月大学名変更
熊本学園大学

国際交流委員会メンバー

◎古田龍助, 勝部伸夫, 貞松 茂, 慶田 收
カーク・マスデン, 足立昭七郎, 堀 正広
今井義量, 大野哲夫, 星子三郎, 西村禮二
喜佐田知子 (◎は委員長)

〒862 熊本市大江2丁目5番1号

 **熊本商科大学**
熊本短期大学

TEL (096) 364-5161
FAX (096) 372-4112
